

〔文部科学省委嘱研究〕

# 学校における望ましい動物飼育のあり方

日本初等理科教育研究会

# 「学校における望ましい動物飼育のあり方」目次

まえがき

## 第1章 子どもの成長・発達と動物飼育

- 第1節 幼児と動物飼育……………1
- 第2節 児童と動物飼育……………4

## 第2章 学校における望ましい動物飼育

- 第1節 飼育動物にあたって……………7
- 第2節 心をはぐくむ飼育活動……………9
- 第3節 飼育動物の例 ……………11  
(ウサギ、モルモット、ハムスター、ニワトリ・チャボ)

## 第3章 動物飼育の課題と対策

- 第1節 飼育動物の疾病と対策 ……………31
- 第2節 学校における動物飼育の工夫 ……………42
- 第3節 動物飼育のためのネットワークづくり ……………53
- 第4節 動物飼育と関係法令 ……………55

## 第4章 動物飼育の活動例

- 第1節 幼児における動物飼育の活動例 ……………59
- 第2節 小学校低学年における動物飼育の活動例 ……………63
- 第3節 小学校中・高学年における動物飼育の活動例 ……………69
- 第4節 子どもの生活と動物飼育の例 ……………74

参考文献及び引用文献 ……………77

作成委員 ……………78

参考資料 小学校学習指導要領における動物関係の記述抜粋 ……………79

※「第2章第3節 動物飼育の例」、「第3章第4節 動物飼育と関係法令」については、平成18年6月に一部改訂を行った。

## まえがき

手のひらに乗せたハムスターに、頬を寄せて嬉しそうに語りかけている子どもたちのしぐさは、いつの時代においてもほほえましい光景のひとつです。命あるものとの触れ合いのひとつを、幼児期や児童期に過ごすことの大切さはいうまでもないことですが、昨今、その様相が少し変わってきているように思われます。

時として、学校の飼育舎が壊され、ウサギやその他の小動物が襲われ、無残な姿で放置されているというような出来事が新聞やTVで報道されることがあります。そうした記事を読む人々の胸になんともいいようのない痛ましさを残します。なぜ、そんなことをするのでしょうか。被害にあった学校の子どもたちの、悲しみと不安と怒りの気持ちはいかばかりなのかと思いやる方々も多いことでしょう。

ところで、最近では、小動物を飼う側にもさまざまな問題点が浮かび上がってきています。その原因の多くが、正しい飼い方を知らないままに、生き物を飼っていることにあるようです。いや、もっといえば、「動物に触れないままに大人になってしまうことが多くなってきた結果、自分の子どもに対しても、動物との触れ合いを通して育つ命のしくみや、自然とのかかわり方を学ばせる“学ばせ方”がわからない親が増えてきている。」といっても過言ではないでしょう。そうした意味において、今日、学校での動物飼育の教育活動は「新たな転換期を迎えようとしている」ことも事実のようです。

動物を、責任をもって飼い続けるということは大変なことです。毎日のエサやりから水替え、飼育小屋の掃除、あるいは、適度な運動や温度管理、そして病気の早期発見とその手当等、動物の命を守るための自分の果たさなければならない務めを、自分の都合で勝手に変えることは出来ないからです。だからこそ、生き物を飼うという営みを通して身につく事柄も多いのです。例えば、ものいえぬ動物側の立場になって、ものごとを考えたり感じ取ろうとする感性の豊かさや思いやりの深さが、次第に培われていくこともそのひとつといえるでしょう。

ところで、学校のような所で数多くの動物を飼育していると、その世話におわれ、幼児や児童、教師ともに負担が大きくなり、動物を飼うことへの抵抗感が増幅しかねません。そして、もう二度と動物なんか飼うものか、などといった気持ちだけが残るような結果になったのでは何にもなりません。そうしたことを防ぐために、このたび、その道の専門家である獣医師の方々に動物の生態や習性、あるいはどんな病気にかかりやすいか等についての話を聞きながら、ともすると制約の多い環境のなかでの「学校における望ましい動物飼育のあり方」をまとめてみました。

日本初等理科教育研究会

前 理事長 山口 令司

# 第1章 子どもの成長・発達と動物飼育

## 第1節 幼児と動物飼育

### 1 幼児期の発達と心の教育の重要性

幼児期は大人への依存を基盤として自立へ向かう時期であり、幼児は生活や遊びのなかでの具体的な体験を通して、生きるためのもっとも基本となることを獲得していく。

特に、幼児期において自然（身近な動植物との触れ合い等）のもつ意味は非常に大きい。幼児は、自然の偉大さ、美しさ、不思議さや、命の大切さなどを、直接触れる体験をとおして実感し、心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等の基礎を培うことができる。

また、幼稚園で小動物の飼育をしながら生き物の成長を喜んだり、見たり、触れたり、聴いたり、匂いを嗅いだりなどして小動物に親しみ、世話をするなかで、自分以外の相手を思いやる心を育み、豊かな人間形成の基礎を培うことが期待できる。

### 2 幼児の見方、考え方、感じ方を豊かにする小動物とのかかわり

#### (1) まず触れること、親しむこと

幼児期には、幼稚園で小動物とともに生活し、抱いたりエサをあげたり、またダンゴムシや、ミミズを集めて遊んだり、カタツムリやザリガニ、アリ等を飼育したりして、虫の形や色、匂いや動き等に興味をもち、発見したり、驚いたりする経験をとおして世界を広げていく。

3～4歳児では、モルモットやウサギ、チャボ等の小動物に恐怖心や嫌悪感をもち、小動物とかわることに抵抗を示す幼児もいる。このような場合に、まず教師が小動物をかわいいと受けとめることが重要である。子どもたちは、その教師のかかわり方に触れたりしながら、徐々に不安感を解消していくと考えられる。

幼児が、小動物にかかわるようにしていくための、よりよい環境を作っていくことが、まず求められる。例えば、園庭にサークルを置いてモルモットやウサギを放し、幼児が友達と一緒にいつでも触れたり、抱いたり、エサをあげたりできるようにしておくことも、環境の配慮のひとつである。

また、3～4歳児は、特に自己中心的な思いが強く、生き物の動きを試し、オモチャのように見立てて遊ぼうとする。このような場合には、教師が小動物の気持ちを代弁する必要もある。人間の幼児は、小動物にとってはライオンのように思えることを説明してあげたり、教師もともにやさしくかかわったりして、幼児の小動物へのかかわり方を援助していくこと

も大切である。幼児が小動物に十分親しみ、愛着をもって接することができるような環境を作っていくことが、小動物に親しんだり、触れたりしていく第一歩につながると考えられる。

(2) 「あっ！ニワトリの卵を落としちゃった!! でも…ひよこが出てこない？」

幼児が幼稚園で小動物を飼育するなかで、獲得するものは大きい。幼児は小動物の飼育をとおして小動物の立場に立って世話をしようとする温かい思いやりの気持ちを育み、いろいろなことを体験的に学んでいく。

これは、ニワトリの雄1羽、雌3羽をひよこの時からもらい受け、年長5歳児を中心に飼育した時のエピソードである。

**初めてニワトリが卵を産んだ!!**

ひよこが幼稚園にやってきてから1ヵ月。年長5歳児がエサをやり、水を替えたり、小屋の中の掃除をしたりして毎日楽しそうに取り組んできた。かわいいひよこの姿には4歳児も5歳児も親しみをもち、園庭のニワトリ小屋の側によく集まってきていた。そんなある朝、園庭から、幼稚園中に響きわたるような大きな声で「卵がある！卵を産んだ！」という声。幼稚園中の子どもたちがニワトリ小屋の前に集まってきた。「あったかいヨ!!」卵をみつけたミツオが、そおっと、いとおしそうに卵を手のひらに乗せていう。「ほんと、かして!」「私も」「僕も」と卵は子どもたちの手から手へ。そして、ポトンと下に落としてしまう。「あアー!!」という子どもたちの悲鳴。シーンとなった時4歳児のタクマがすっとんきょうな声で「あれエー、ひよこが入っていない!!」すると5歳児のミツオが「バカ、卵の中には黄身があるんだヨ」という。冷蔵庫の中の卵は毎日見てきているのに、自分たちで飼育していたニワトリが初めて産んだ卵は、こんなにも発見や驚き、そして感動を子どもたちに与えたのである。

毎日、交代で動物の飼育場を掃除したり、エサをあげたりする直接体験を繰り返していくと、小動物へのかかわり方も大きく変わっていく。

例えば、エサをきれいに並べるだけのことから、昨日の残り具合をみて、その小動物は何が好きか、何をよく食べるかに気付き、野菜や固形飼料の量を考えるようになったりする。また、小動物の動きを昨日と関連させながら、「今日は、少ししか動かないぞ、病気かな」と気づき、心配したり、「アヒルは水が好きだけど、ウサギは水がきらいなので一緒にしない方がよい」など、その動物の生態や、その動物に合った環境にも気づくようになったりする。

小動物の世話も、教師が当番活動として義務付けるのではなく、幼児の小動物に対する愛着心や親しみの感情を大切にしながら、幼児が世話をすることをとおして、小動物の立場になって考えたり、思いやったりする内面成長を大切にうながしていきたい。

ニワトリ小屋を掃除した後、ニワトリの様子を見ながら「ニワトリさんが気持ちいいって喜んでるヨ!」と満足そうにいつている幼児の姿には、自信と充実感と成長の様子が見ら

れる。

### 3 命あるものとしてのいつくしみの心情や思いやりの心を育む

#### モルモットの「みみ」、「るる」、「りぼん」がいるから幼稚園だぁ〜い好き!!

小動物とのふれあいが幼児の心をいやし、ホッとする空間や時間を作りだす。

4月に入園した4歳児のユカは、集団生活への緊張感がとれなかったり、母親と離れられなかったりしていた。しかし、ユカが幼稚園で自然に顔がほころび、嬉しそうにするのは3匹のモルモット、「みみ」、「るる」、「りぼん」との触れ合いである。キャベツやレタスの葉を飼育小屋の金網をとおして入れてあげたり、モルモットのかわいい動きを飽きずに見たりしている。そのうち、モルモットの小屋の前に、ユカと同じようにやってくるケンとふっと顔を見合わせて、ほほえんだりするようになり、幼稚園生活や友達に徐々に馴れていった。また、2月の連休に大雪が降った日、幼稚園で飼育しているモルモットが寒さで死んでいないか心配で、誰もいない幼稚園に見に来た幼児もいる。

幼児は、小動物に親しみ、日々世話をし、愛情を抱くようになると、オモチャのように扱っていた小動物を生命あるものとして受けとめ、いたわりや思いやりの気持ちを持つようになる。このようなことを体験をとおして実感していくことが、人間形成の基礎を培う幼児期に大きな価値を持つ。

## 第2節 児童と動物飼育

子どもと動物との関係は、親しみの気持ちやなごみの心が育ち、溶け合うような触れ合い方が生まれるものである。しかし、今日の生活環境からは、自然体で触れ合うことのできる場が失われつつある。改めて、学校で生き物を飼うということについての意味や意義を考えておく必要がある。

### 1 飼育活動を通して、学び育つ子どもの姿

学校という場で飼育活動を行うことは、動物たちとの触れ合いをとおしてこそ育つ大切な教育効果を持つ。例えば、次のような事柄がある。

- ① 飼い続けることによって学ぶもの
  - ② 協力しあって共に世話をするなかで学ぶもの
  - ③ 動物の固有の性質や習性の中から学ぶもの
  - ④ 感動を表現し、活動を振り返ることによって学ぶもの
  - ⑤ 地域の人とのかかわりのなかで学ぶもの
- ① 飼い続けることによって学ぶもの

飼い続けるということは、大変な営みであり、労力のいることである。根気や忍耐、あるいは命あるものを守るといった強い使命感が必要である。そして、それらのことを支えるものは、飼い続けることで次第にわかってくる動物たちのさまざまなしぐさ、動きをとおして感じる愛らしさや親しみなどの愛情であろう。

動物たちのもつ親子の愛情の深さに触れたり、しぐさの愛らしさに触れたりすること。あるいは、ぐんぐん育っていく成長の様子から感じられる生命力の素晴らしさ。これらは、飼い続けることによって得られる学びの内容である。それは、間接体験では得ることがむずかしいものである。感受性の豊かな児童期に、動物たちと直接触れ合うという体験を行うことによって、残忍な行為に対する批判的な精神や価値観を形成する基礎が培われていく。

さらに、世話をするという行為からは、強い責任感が芽生えるとともに、自分自身の有能感や効力感を意識し、ひいては自尊心が育つようになってくることも見逃せない。このことが、自分も動物も共に命あるものとして、大切にしようとする気持ちを育てていくことにつながっていく。

### ② 協力しあって共に世話をするなかで学ぶもの

生活科で小動物を飼育する場合は、級友と一緒に協力し合いつつ世話をすることになる。さらに、高学年になって児童会活動の一環としての飼育委員会において飼育活動をする場合に

は、学級や学年を異にする人間関係のなかで動物の世話をすることになる。おたがいに相談し合って、役割や分担を決め、動物たちのために力を合わせて協力し合うことの大切さを学ぶ。約束を破ったり、自分勝手な行動をすれば、級友も動物も困るということに気付いていく。

動物の習性や特徴を踏まえ、級友と一緒にになって世話をすることによって、おたがいに気付いたことを話し合うことができる。そのことが、観察する楽しさや意欲を一層高めるようになる。動物のためになることをしてあげようという思いやりの心をさらに強くしていく。そうした心の働きがあるからこそ、自分たちの仕事や役割分担の内容や方法などについて真剣に考えるようになる。こうして、責任をもって自分の仕事を果たすことや、動物の命を守るための気持ちが培われていく。

### ③ 動物の固有の性質や習性の中から学ぶもの

動物にはそれぞれ固有の特徴や習性があり、子どもの都合に合わせた生活行動をとってはくれない。そのことが、動物の身になって考え、行動することを学ぶ機会となる。

また、飼育することは、飼育する側の自分たちが、その動物の生命と生活のすべてに責任を持つことを学ぶことでもある。毎日のエサやりから始まって、排泄物の処理、誕生や病気・死別への対応等、さまざまなことについて手を抜くことが出来ない。

さらに、「誕生—成長—繁殖—病気—死」といった生命の循環を知ったり、繁殖行為をとおして生命の不思議や尊厳にも触れたりしながら、命あるものの生き方への理解を深めていく。これは、間接経験では得にくいことである。

### ④ 感動を表現し活動を振り返ることによって学ぶもの

毎日の世話をとおしてさまざまなことに気付く。例えば、動物たちの動きと排泄物の様子とを結び付けて体調の変化に付き、病気なのかと心配する。あるいは、抜け毛の多さを心配しながらも、それが冬毛から夏毛への変わり目の避けられない出来事だとわかると、動物のもっている工夫の素晴らしさを感じとる。

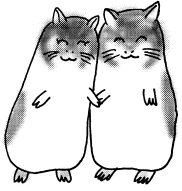
動物と触れ合う感動を味わった子どもたちは、それを何らかの形で表現しようとする。その活動は、同時に自分たちが世話をしている動物のしぐさや表情を思い浮かべ、動物と自分を同化させようとしている活動ともいえる。それは、動物のもつ温もりを強く意識することであり、“なごみ”のある大切な一時といえよう。

### ⑤ 地域の人とのかかわりのなかで学ぶもの

動物を飼育するには、近隣の人とのいろいろな問題にも直面する。例えば、鳴き声や臭い、病気、繁殖によって増えた動物の里親さがしなどが考えられる。子どもたちの手で解決するには大きすぎる問題が発生することもある。

問題に対して、学校が教育活動の一環としての基本的な考え方を持ったうえで、子どもと一緒に考えていくことは、地域の人々の願いや要望に応えることを考える機会を持つことになる。





memo

A large, empty rectangular area with rounded corners, intended for writing a memo. The area is bounded by a thin black line.

## 第2章 学校における望ましい動物飼育

### 第1節 動物飼育にあたって

学校における望ましい動物飼育を行うにあたっては、必要かつ十分な条件を整えることが大切である。また、条件整備を行うこと自体も動物飼育の大切な内容でもある。

動物飼育のねらいの実現には、まず学校で動物を飼育する意義や目的について、教科や特別活動等における位置づけや指導の基本との間で明確にし、飼育に対する考え方をしっかり持たなければならない。

次に、それを保護者や学校の近隣及び地域の人々に説明し、理解や支援を得るようにする。飼育活動にこれらの人々の意見を反映させることも考えられる。

動物飼育にあたっては、何よりもこうした取り組みが必要である。そして、これを毎年確認し合い、常に新たな気持ちで飼育を続けることが大切である。

#### 1 動物飼育の考え方

動物を飼育することは“動物とともに暮らす”ということである。動物は、教材としての「物」ではなく、子どもたちにとってのよき「生きた仲間」である。動物の世話をすることは“命を預かる”ことを意味する。世話をする者は、自分と同じように、動物の体の健康や心の安定を考えながら交流しなければならない。また、望ましい動物飼育をするにはゆとりが必要である。学校や地域の実態に合った動物を、適切な数だけ丁寧に末永く飼育するようにしたい。

#### 2 何を飼育するか

適切な飼育のためには学校や地域の実態に即した動物を選ぶことが望ましい。学校の規模、施設、教職員等、自校の実態を考慮する。また、地域の気候や環境などにも配慮する必要がある。あまり特殊であったり、手間がかかりすぎる動物は飼わないことが望ましい。また、地域でよく飼われている動物は、学校で飼育するにあたっての支援者や協力者等も得られやすい。

#### 3 どのように飼育するか

飼育の実際を考えれば、動物の快適な生活環境の維持、掃除や管理のしやすさなどを考慮して、適切な空間を確保することも大切である。それによって動物同士の争い、ケガや病気も少なくなり、動物は安心して生活ができるようになるし、子どもたちもゆとりをもって飼育を楽しむことができる。また、動物の数は基本的に増やさないようにしたいようになるし、動物の

子育てに出会わせたいときには、事前に飼育してくれる人を見つけてから繁殖させることが必要である。

### 動物を安全に飼うために

#### 入手方法

： 信頼できるところから動物を入手する。

#### 新入り動物を仲間入りをさせるとき

： 前から飼っていた動物とすぐに一緒にしないで、2週間ぐらい隔離飼育して健康を確かめる。

具合が悪いときは、治療が終わってから一緒にする。(不用意に一緒にさせて感染した場合、すべての動物の治療が必要になるおそれがある。)

動物が伝染性の病気になったときは、飼育舎(箱)をよく洗浄したのちに消毒する。消毒薬は病気の種類や飼育箱の素材等によって使いわけが、金属製の熱に強いものには熱湯、木製やプラスチック製には塩素系漂白剤などを使う。この作業は危険をとまなうため教職員が実施する。

また、新しい動物と前から飼っていた動物とのけんかを防ぐため、新しい動物を1～2週間ほどカゴに入れて、前から飼っていた動物のそば(飼育舎なら、カゴを中に入れておく。)に置いてなれさせる。おたがい気にしなくなったら、新しい方をカゴから出して一緒にさせる。

#### 動物に触るとき

： 動物に触った後、手をよく洗う。(動物に触れる時は清潔な手で触ること。)

#### 動物に噛まれたとき

： 傷をよく水で洗い、ヨウ素系消毒剤などで消毒するが、その際、医師に噛んだ動物の種類や様子などを伝える。傷の深さや動物の様子によっては、ただちに医師の診察を受ける。

#### その他

： 教室内で飼育する場合は、特に飼育舎を毎日よく掃除して、排泄物、羽毛等が飛び散らないよう、衛生管理に留意する。

## 第2節 心をはぐくむ飼育活動 —教師、保護者、子どもたちへのメッセージ—

### 1 動物を心配する子どもの心を大切に

教室に1匹のハムスターがいるだけで、子どもたちの雰囲気になごやかになり、クラス運営が楽になるとの報告を多くの教師から聞く。東京のある小学校では、増えたハムスターを各教室にわけて飼っているうちに、子どもたちがなごやかになったとのことであった。クラスで飼っていた動物が死んだ際に、子どもたちが「思い出をありがとう」という紙芝居を作り、学校中のクラスで鑑賞している例もある。校長によれば、「当校にはいろいろな事情の子どもたちが通っているが、問題が生じないのはクラスで飼っている動物たちと、クラスを支えている教職員のおかげと感謝している」とのことであった。

動物には、周りの人々の関係を修復する力があり、人の心を安らかにし、開かせるともいわれている。これを利用して医療施設やリハビリ施設で、ペット動物を活用した治療が行われている。また、おとなしい動物の存在は人の血圧を下げる力があり、動物を飼育している心臓病の患者の生存率は、飼育していない場合に比べて高いとの報告もある。最近行われている老人ホームでのペット動物飼育や、小児科病棟へのイヌの訪問活動なども、動物の人を元気にさせる力を利用したものである。

子どもと動物たちはよい関係を築くことができる。もしも、動物が傷ついたり元気がなくなったりすれば、子どもはすぐに気づき、心配し、教師に対して助けを求めてくることも考えられる。したがって、手当ての必要な動物は放置せず、きちんと治療するようにしたい。それが子どもの心を大事にすることになる。

### 2 子どもの心に命の息吹を

最近ではペットブームで、テレビなどに動物の様子が毎日映し出されており、視聴率もよいそうである。しかし、現実には、動物に触れる体験を一度も持てないまま大きくなってしまいう子どもたちも多い。

動物に触れた体験のない子どもは、ちょっとしたことで動物を遠ざけてしまう。

一方、小さい時から昆虫やハムスター、犬や猫などに触れて育ってきた子どもは、少々の汚れや、小さな傷をものともせず、お気に入りの動物と遊び安らぐことができる。動物と触れる体験のない子どもたちに比べ「生きる力」がついている。

また、「可愛がっていた動物の死に立ち合ったことのある子どもは、その体験のない子どもより自殺を否定する」、「動物を飼っている少年達の方が、友達から信頼されていた」などの報告がある。ペット動物を持てた子どもが、さまざまなストレスをペット動物と一緒に乗り越えていった例も多く、最近では動物を心理療法に使うこともある。

このように、有用な力を持つ動物であるが、現在ではさまざまな理由で子どもたちにペット

動物を与えない家庭が多く、子どもたちは映像や疑似体験などでペット動物を持ってないことを代償することも多い。

子どもが動物を欲しがったら、心を成長させるチャンスである。欧米には、「犬（などのペット動物）も子どもも、親がしつけ、社会化するもの」という考えがある。動物を飼えば、いろいろな手間がかかる。家も汚れる。しかし、子どもを思いやり深く育て、生きる力をつけさせるためにも、やはり子どもの動物への興味を大切にしたい。子どもの成長にペット動物が与える影響は大きい。

### 動物の命は、あなたがにぎっている（子どもたちへ）

動物は、本当は広い自然のなかで生活しています。しかし、みなさんのところで暮らしているウサギやニワトリ、他の動物はどう思っているのでしょうか？

「もっと広いところで、のんびりしたい」

「あのウサギが、追いかけて、かじってくるからこわい」

「今日はとても暑くてのどがかわいている。水がほしい」

「あの子は、やさしくさわってくれるし、いつもエサをくれるから大好きだ」

「あっちの子はいつもぎゅーと抱きたがり、追いかけてくるからこわい」

「卵を産みたいけど、どこにも産む場所がないので、おなかが苦しい」

「ひよこがかえったけど、ウサギが見に来るので落ち着けないし、ひよこ用の水飲みもない。親用の水飲みに落ちて死なないといいけど」

「あー、ふんが散らばって、きたなくていやだな。」

「思いつきり走ってみたいな。でも、犬や猫につかまるかも」

なんて、考えているかもしれません。

動物が自然のなかで暮らしていたら、自然はとても広いから、ふんをした所で寝るなんてしなくてもよいのです。だからそうじをしなくてもよかつたし、エサだってあちこちにあり、いつも自分で見つけられました。でも今はせまい飼育舎の中です。みんなのくれるエサや水がなければ食べ物もありません。気をつけてあげなければ、ふんや食べ残しのごみの中の生活で病気になったり、エサがなくなって死んでしまうこともあります。毎日世話をしてくれるみなさんのやさしさに、動物の命や幸せがかかっているのです。

動物は、人間の言葉で自分の気持ちを話せないで、みんながよく動物の表情や、動きを見つめて、動物が何に困っているか、何を喜んでいるかを考えてあげてください。そして、いつも動物が安心して暮らせるように気をつけてあげましょう。やさしい気持ちで世話ができるようになれば、動物やいろいろな人とももっとなかよくなれるでしょう。楽しいですよ。

### 第3節 飼育動物の例

学校では、多くの種類の小動物が飼育されている。

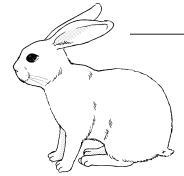
本節では、ウサギ、モルモット、ハムスター、ニワトリやチャボの飼い方について解説する。これらの小動物は、比較的多くの学校で飼われているが、ここに解説する小動物を、どこの学校においても飼育することを求めているものではない。

飼育の例を解説するにあたっては、その小動物の習性、飼い方（飼育舎、エサ、かかわり方）、繁殖、病気やケガ等の観点からそれらの要点を述べている。

本節で取り上げた以外的小動物を飼育するにあたっては、ここで取り上げた観点を参考にして、該当する小動物について具体的に調べ、それらの要点を知って飼育に臨むようにしたい。

また、獣医師とは日頃から連絡をとり、気軽に相談や治療などをお願いできるようにしておくことが大切である。

# ウサギ



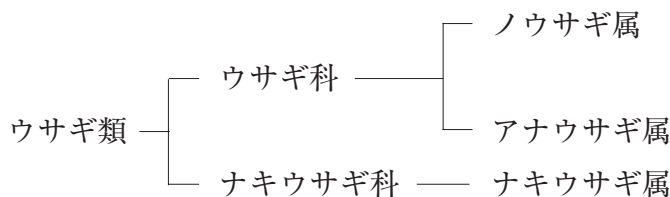
## 【ウサギの飼育にあたって】

- ウサギは繁殖性が高いため、雄と雌を一緒に飼うと子がどんどん増えるため基本的には仕切りを設け、雄と雌を分けて飼う。
- 雄同士はせまいところに入れていると激しくけんかをするので、雄は去勢手術を実施するとよい。これができない場合は、十分なスペースをとるか1羽ずつ別々に飼育する。
- ウサギは怖がりなので、おどろかさないようにその扱い方には十分注意する必要がある。
- ウサギ（アナウサギ）は土に穴を掘るので、脱走に注意する。
- 寿命は大体5～7年くらいである。
- ウサギが原因不明で死んだ場合には、必ず地域の獣医師に連絡を取るようにする。

## 1 習性

- ①成熟するにつれて、特に雄はなわばりを確保するために他の雄と争う。
- ②暑さに弱く、夏には十分な注意が必要であり、水分を十分与え、日陰で飼うようにする。
- ③保温に注意し、特に子ウサギの場合、夜は暖かいところに置く。
- ④たいへん臆病である。
- ⑤地中に穴を掘って巣を作る。
- ⑥夜行性なので昼間は十分に休ませる必要がある。
- ⑦硬軟両方のふんをし、全量の約80%は硬ふんである。クリーム状の軟ふんだけを食ベ（食ふん）、球状の硬ふんとして排出される。

## 【ウサギの分類】



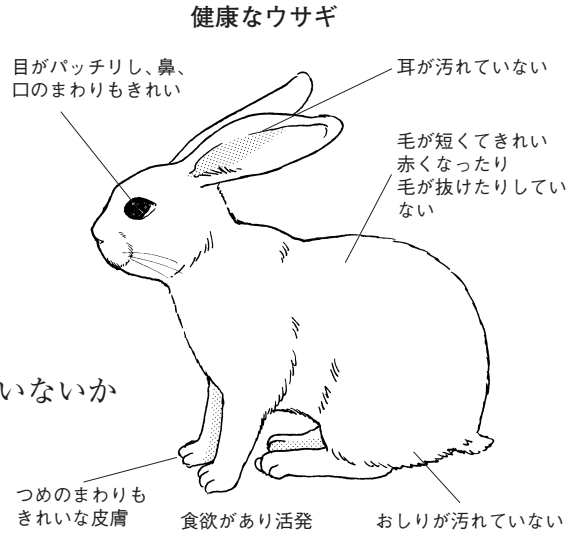
## 2 飼い方

### (1)入手方法

ウサギを飼っているところに依頼し、生後2～3ヵ月の子ウサギを譲ってもらう。

ペットショップで購入する時は、様子を見たり、エサを与えてもらって十分観察する。具体的には、次のようなところに気をつける。

- ・人に慣れているか
- ・耳の中がきれいで、かさぶたやただれはないか
- ・涙、目やに、よだれ、鼻汁が出ていないか
- ・ケガをしていないか
- ・やせていないか
- ・お腹がふくらんでいないか
- ・動き方や歩き方がおかしくないか
- ・神経質そうに動き回ったり、びくびくしたりしていないか
- ・雄か雌か
- ・肛門の周辺はきれいか

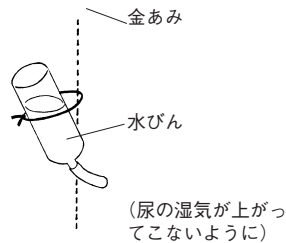
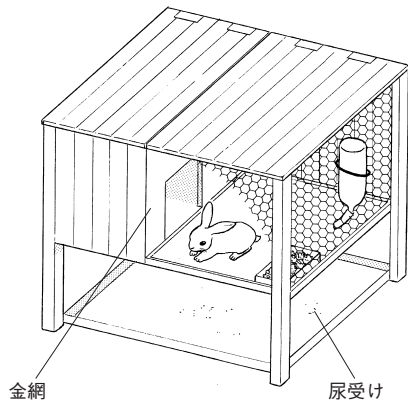


## (2)飼育舎

設置場所は、夏期には湿気がこもらず、冬期に日当たりがよく、床がよく乾燥するところにする。

### 〔単独飼育の場合〕

#### 単独飼育の飼育舎

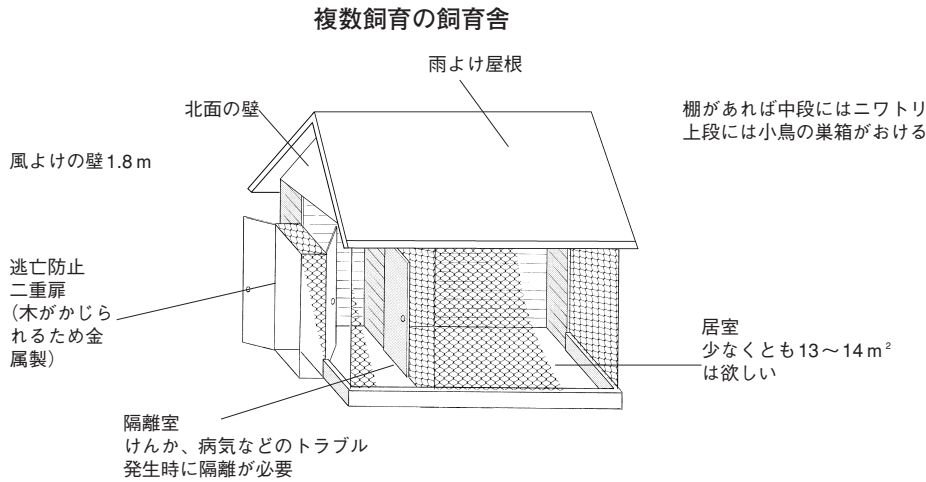


### 〔複数飼育の場合〕

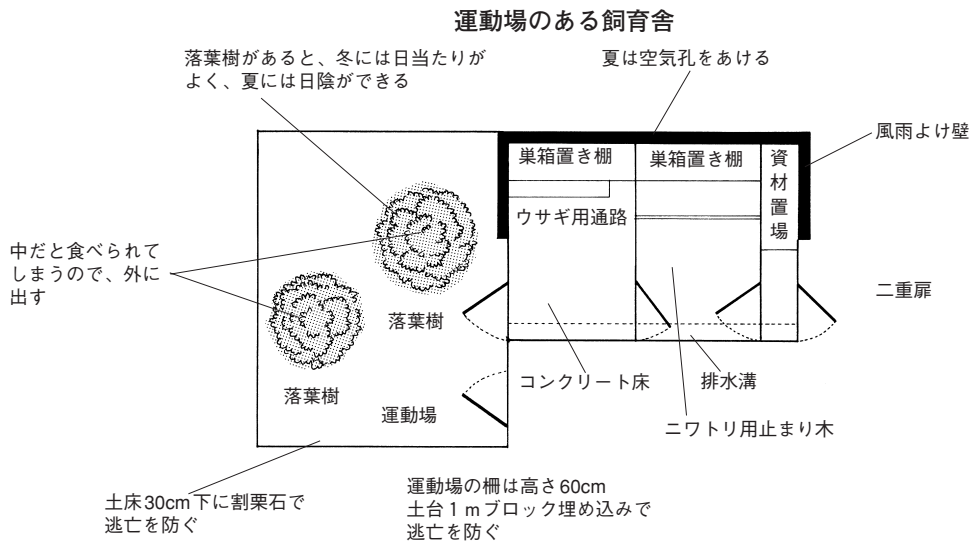
飼育頭数が適度の場合は、ウサギは排便場所を決めて他の部分は汚さずに生活をする。もし、床中にふんが散らばっていたら、頭数が多すぎるか、部屋が狭すぎる可能性が高い。この場合ウサギ同士の争いも生じやすくなる。ウサギは鋭い歯を持つので、集団のまま放置しておくことは避ける。特に雄は闘争性が高いので去勢手術もしくは単独飼育をするか、あるいは隔離できるようにいくつかケージを用意しておくとうい。

飼育舎の床が土の場合は、土台を60cmの深さまで埋め、土の下に石を敷いて逃亡を防ぐようにする。しかし、土は衛生上の管理が困難なため、防水コンクリートの床が望ましい。





P.45参照



巣箱の例 (P.27 飼育小屋の項参照)



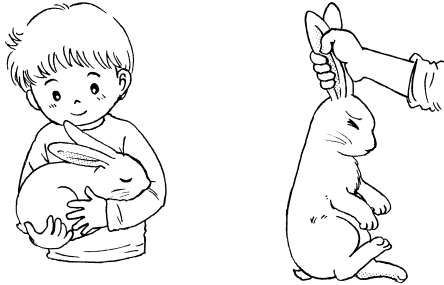
### (3)ウサギの抱き方

ウサギは怖がりである。人に抱かれているウサギが不安を感じると、急に鋭いつめで引っかかりたり、後ろ足で人を蹴るなどすることがある。この時、ウサギをはなすと地面に落ちて骨折することもある。高い所から落とすと背骨の骨折など生死にかかわる可能性もある。そのため、座って抱くようにする。

なお、持ち方はそっと首から肩にかけて背中中の皮を大づかみし、片方の手で尻を支える。慣れたウサギであれば、わきから胸を抱いてもう一方の手で尻を支え、自分の胸にしっかりと抱く。

よい例

悪い例

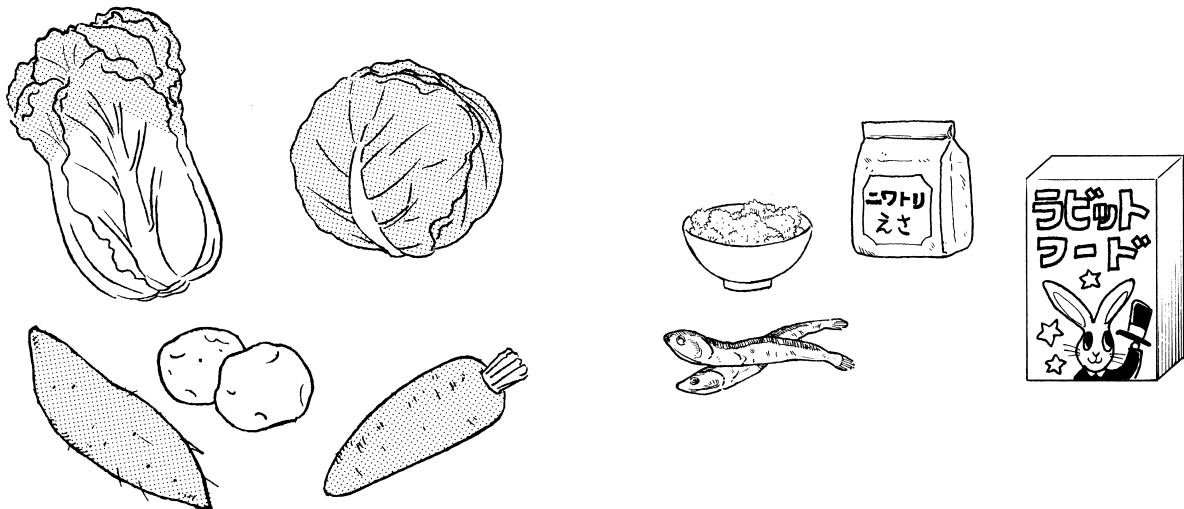


#### (4)エ サ

給食の残りや野草でまかなっていることが多く見られるが、量の不足や栄養の偏りが見られるので、市販のウサギ用飼料を与えるようにするとよい。補助食として野菜（ニンジン、キャベツ、白菜、イモ類、カボチャ、小松菜、パセリ、タンポポ、クローバー、干草など）を与える。エサは、毎日新しいものと取り替える。ウサギ用飼料がない場合は煮干しも与える。なお、ネギ類、ショウガ類など刺激の強いものは与えてはいけない。

1回のエサの量は、1羽につきウサギ用飼料100g、野菜は容器に山盛り一杯で、朝夕2回、大体1時間で食べ終わる量を目安とする。

水は、市販の給水器を使うとこぼれる心配がないが、飲み方がわからないウサギもいるので飲んでいるかを確認する。飲んでいない場合は、のどが乾いている時に給水器の先をウサギの口に近づけることで飲み方を覚えさせる。その際、給水器から水が出ることを確認する。



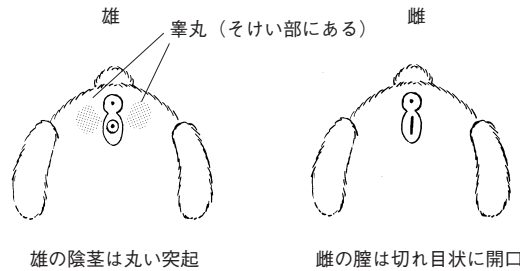
#### (5)掃 除

ウサギは、大量の排泄物で小屋を汚す。まめに掃除してウサギの足を常に乾いた状態にしておくことが大切である。ほうきやシャベルなどで床に落ちた排泄物や食べ残しの野菜をきれい

に取り除く。また、エサ入れは毎回洗い、水でよくすすいだあと拭いてからエサを入れる。

### 3 繁殖

ウサギは繁殖性が高いため、飼育頭数をむやみに増やさず、適正に数をコントロールすることが大切である。そのためには、普段は雄と雌は別々にしておいたり、動物病院で去勢手術をしたりする方法が考えられる。



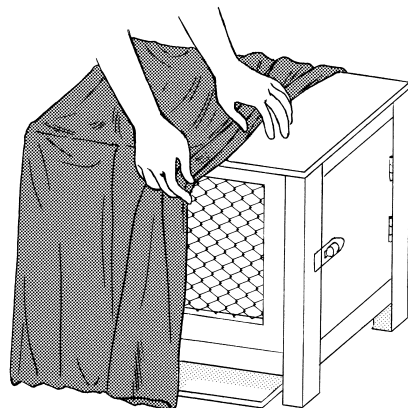
#### (1)交尾

雌は4ヵ月から妊娠可能になるが、適齢期は8ヵ月～3歳頃までである。繁殖回数は年8回まで可能であるが、2回までが適当である。約2週間の周期で排卵があるので、半月も雄と一緒にしておけば妊娠する。繁殖時期としては、春から夏にかけてが一番よい。梅雨期や猛暑期は避ける。妊娠後は、雄を他の場所へ移す。

#### (2)妊娠中の世話

雌にエサや水を十分にやり、飼育箱に巣材となるほし草などを入れておく。

妊娠期間は31日程度で、出産間近になると、雌は自分の胸や腹の毛をむしって巣材にして巣を整える。不安を感じると母親は子どもを食べたり授乳をやめたりするので、巣作りの時期から産後2週間ほどは、母親を落ち着かせるため巣をのぞいたりせず、掃除も最小限にする。



#### 妊娠中の飼育箱の取り扱い

- ★飼育箱の1部に厚めの布をかけうす暗い空間をつくる。
- ★エサやりなどの世話の際に、おどろかせないように気を付ける

#### (3)出産

子ウサギは5～6羽生まれる。母親が落ち着きを失うと子ウサギをかみ殺すこともあるので、そっとしておき、子ウサギに手を触れたりしない。

#### (4)出産後の世話

赤裸の赤ちゃんは、母親の毛で包まれて育ち、4～5日でうぶ毛がはえ、1週間で耳が聞こ

え、2週間で目が開き、3週間で巣から出てやわらかい草を食べるようになる。

授乳中の母親は、多量の水を飲むので、水をいつでも飲めるようにしておく。水の代わりに牛乳を与えてもよい。離乳は45日を目安とし、寒い時期や梅雨期は少し遅らせるほうがよい。離乳は母親を他の箱へ移すことで行う。離乳後の1ヵ月半がもっとも大切な時期で、青草、茶穀、ふすま、ぬか、おからなどビタミン、タンパク、カルシウムなどを含むエサを少しずつバランスよく与える。また、夜間の保温にも十分注意する。なお、授乳は夜間1回だけである。子どもが大きくなれば心配ない。

#### 4 かかりやすい病気と対処の仕方

やせて元気がなくなる、物音がしても反応が鈍い、せきをしたり苦しそうに鼻汁を出す。このようなときには病気の疑いが高い。

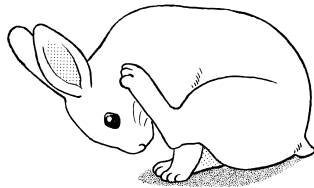
肛門付近が汚れている場合は下痢をしていることが多い。また、毛皮が汚れていたり固まったりしている場合は外傷の可能性がある。耳の内部がただれたり、かさぶたができていたりしている場合はダニが付いていることがある。

いずれの場合でも症状をよく観察し、獣医師に相談したり治療したりする。また、こうした症状が観察されたり病気にかかったりしたウサギは、他の健康なウサギと一緒にしないようにする。また、一度病気が出た飼育箱（舎）は消毒をする。

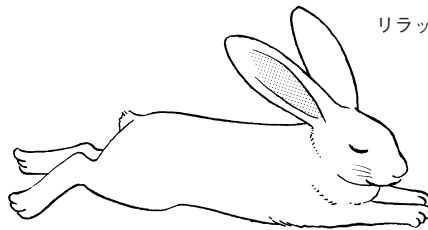
#### 5 その他

##### 〔ウサギのいろいろなしぐさ〕

毛づくろい

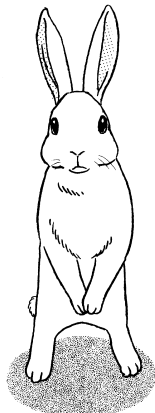


リラックス



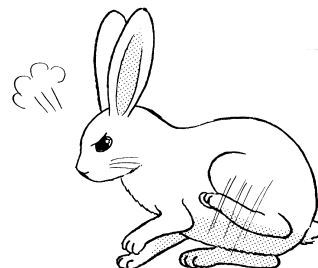
立ち上がる

危険を感じて警戒しているときは、後ろ足だけで立ち上がり、耳をピンと立ててあたりのようすをうかがう

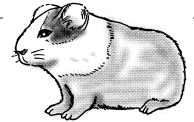


足をならす

危険を感じたときや怒ったときには後ろ足で地面を強く踏み、音をたてながら仲間に知らせる



# モルモット



## 【モルモットの飼育にあたって】

- 跳躍力が低いため、囲いの高さが40cmあれば逃げることはない。
- 生まれてすぐに歯もあり、目も開いている。特に、人間が生まれた子どものために人手をかける必要はない。
- 雄同士にするとけんかをよくし、雄と雌と一緒に飼うとどんどん繁殖するため（一度の出産で平均3匹）、単独で飼育する。
- 寿命は、5年から7年ぐらいである。
- 排泄物の量が多く、毛が長いので、臭いが強くなりやすい。

## 1 習性

- ①温和な性格で、めったに噛んだりしないが、手荒く扱うとあばれたり、噛むこともある。
- ②繁殖力が強い。交尾後60～70日の妊娠期間を経て、2～5匹の子が生まれる。生後2～3ヵ月で性成熟して、子を産むことができる。4～5歳まで繁殖可能である。
- ③成熟した雄同士はよくけんかをする。けんかの時は、よく相手のおしりを噛む。

## 2 飼い方

### (1)飼育ケース

ネズミからの病気予防のため屋内で飼う。ケージ飼いするが、40cmの囲いがあれば乗り越えることはほとんどないため、深さ40cmの衣装ケースでも飼うことができる。なお、雄雌を同じ部屋で飼った時、雄が40cmの壁を乗り越えた事例があるため、必要に応じてフタをする。

雄同士はけんかをし、雌雄同居では盛んに繁殖するため、別々のケージで飼う。巣箱は通常必要ないが、床が金網の場合、足の裏が傷つくので木製の隠れ箱を入れると良い。衣装ケースでは新聞紙を敷き、まめにとりかえ、ケースについての汚れをティッシュで拭き取る。なお、排尿で汚れた時、動物は隠れ箱の上に避難できる。冬は、夜間ケースをダンボールで囲い防寒する。

飼育ケースの例



## (2)エ サ

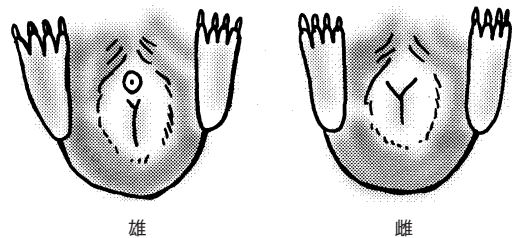
野生のモルモットは草食性であるが、飼われているモルモットは雑食性を示すことが多い。ニンジン、ピーマン、トウモロコシ、サツマイモ、キャベツ、チンゲンサイ、キュウリなどを好む。ただし、体内でビタミンCを作ることができないため、ビタミンCが不足しやすい。ビタミンCを多く含む野菜や、市販のモルモットフードを与えるようにする。

エサは少し食べ残すくらいの量を与える。夏期や授乳中及び固形飼料を与えている場合は、絶対に水を切らさないようにする。

## 3 繁殖

モルモットは、巣を作らずに、集団のなかでもどんどん繁殖する。雄は生まれてから6ヵ月、雌は4ヵ月で子どもを産むことができる。雌は後ろ足が赤くはれて、背中に手を乗せて背中をそらせるような姿勢をとれば、子どもが産めるまでに成長した証拠である。

妊娠期間は60～70日ほどで、2～5匹（平均3匹）の子を産む。生まれた子は目も見えており、動き回る。はじめは母乳が主食になるが、すぐにエサも食べ始める。生後2週間ほどで親から離せる。母乳を与えている雌には栄養のあるエサと水を十分与えるようにする。



雄と雌は、陰囊のふくらみと陰茎の有無によって見分ける。片方の手で動物を持ち、もう一方の人差し指と中指で陰部を広げながら圧迫する。雄の場合は円筒状の陰茎が突出する。幼いとわかりにくいので、成長してから見分ける。

## 4 病気やケガ

下痢をしてお尻が汚れている、目やにや涙がでている、元気がなく関節が腫れたりする、毛が抜けたり皮膚が赤く腫れたりする場合は、環境の変化に対応できなかつたり、病気になっている疑いが強い。

病気を防ぐには、常に新しいエサや水を与え、清潔にして、保温に配慮し、栄養バランスのよいエサを与えるなどの対処が必要である。

また、暑い夏は直射日光が当たらない、風通しのよい場所を選ぶようにする。寒い冬は夜間に毛布を掛けたり風よけを設けたりする。梅雨時や夏は、エサや水が腐りやすいので、食べ残したものは早く片付け、水もこまめにとり替えるようにする。

けんかによるケガや、落ちたり落としたりすることによる骨折も多いので、そうした場合には早めに手当てをする必要がある。病気やケガの疑いがある場合には、症状をよく観察して獣医師に相談したり治療を受けることが大切である。

# ハムスター



## 【ハムスターの飼育にあたって】

- ハムスターはネズミ科の仲間で、温順な性格のゴールデン・ハムスターとジャンガリアン・ハムスター等が飼育しやすい。
- 前歯が伸びるのでよく物をかじる。また、頭の大きさなど隙間があれば脱走するので、飼育ケースは金属製で入口に止め金のついた一段式のケージが適している。
- ハムスターは雑食性で粗食にも耐えるが、ヒマワリの種やピーナツ、新鮮な野菜や果物を好む。市販のハムスターフードはよく食べる上に栄養バランスがとれているので望ましい。
- 1歳半で高齢であり、2歳は超高齢である。
- ハムスターに噛まれた人が、体質によってはアレルギーによるショックを起こす例が報告されているので、噛まれないように注意する。

## 1 習性

- ①夜になると目がさえて元気に活動する夜行性動物である。
- ②快適温度は20～25℃で、5℃くらいになると疑似冬眠に入る。
- ③睡眠時間は1日14時間ぐらいで、寝るときは体温を逃がさないように頭を身体に埋める。
- ④ちょっとしたことで、驚いたり、警戒する。その際、不用意に触ると噛まれる。
- ⑤顔を洗ったり、身体をなめたり、耳の掃除をしたりして、いつも清潔にしている。一定の場所で排泄する。
- ⑥テリトリーをつくるため、お尻をこすりつけてケージや巣、エサなどに自分の臭いをつける。基本的には単独生活を好む。
- ⑦ほっておくと前歯が伸びるので、何でもかじる。
- ⑧頬袋に詰め込んでエサを巣に運び、後でゆっくり食べる習性を持つ。

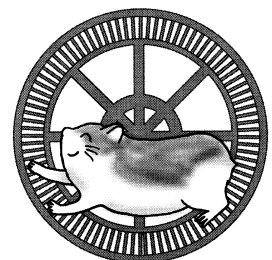
### 《1日の行動》

#### <夕方>

- ・1日の始まり
- ・エサを食べて活動開始
- ・ぶら下がったり、くるくる回ったりする運動を好む

#### <深夜>

- ・深夜は一休み



- ・目覚めたら、また活動する
- ・遊ぶのを好む

<朝方>

- ・夕方まで睡眠



2 入手方法

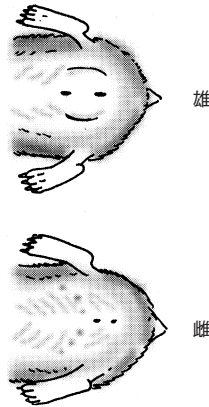
- ・衛生管理がしっかりできている店を選ぶ。
- ・気候のおだやかな春か秋の初めあたりに購入するのがよい。
- ・活発に活動を始める夕方に、数匹以上いる中から気性や健康状態を観察し、体力のある若くて元気のよいものを選ぶ。
- ・雄と雌の見分け方

雄

肛門と生殖器の間隔が長い

雌

肛門と生殖器の間隔が短い



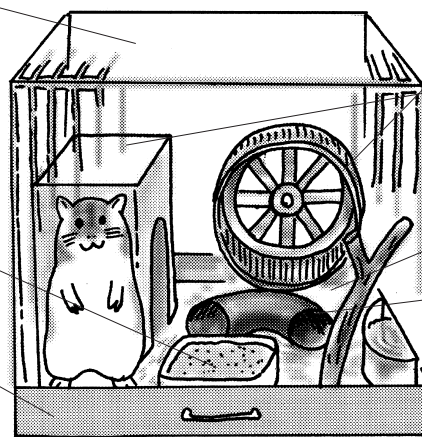
3 飼い方

(1)飼育ケージと器具

木製の箱は簡単に食い破ってしまうので、金属性のかご（ケージ）を使う。

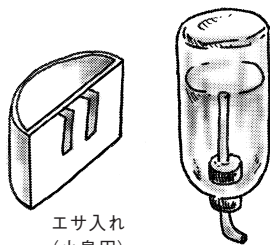
子どもを増やしたくない場合は2個準備し、雄、雌別々のケージで飼う。

- ・脱走防止に入口に止め金の付いた物。2段式は落ちると怪我をするので使用しない。(ハムスターが小さいときは水槽がよい場合もある)
- ・エサ入れ  
浅くて底が広く安定感のある形状、木はかじるので瀬戸物や合成樹脂の物が好ましい。
- ・トイレ  
砂を入れておく。

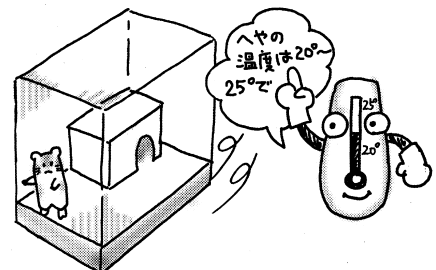


- ・まわし車  
足の落ちない細かい幅のものがよい。
- ・巣箱  
小枝  
かじって歯を削るため乾燥した丸い1本のかたい木を入れる。
- ・床敷  
小さく切ったわら半紙。
- ・チューブ  
砂漠の穴の中に住んでいるので、トンネルの代わりとなる。

給水ビン



エサ入れ  
(小鳥用)





## (2)ケージの置き場所

- ・快適温度が20～25度なので、風通しのよい湿度の低い場所に置く。
- ・急激な温度変化が苦手なので、冷暖房器具から離れた場所に置くのがよい。
- ・臆病で警戒心が強いので、ストレスがたまらないようにテレビの音量を小さくしたり、ドアの開け閉めに気をつけたり、外の騒音のない静かな場所がよい。
- ・夜、部屋が明るい時には、ケージを布で覆うようにする。
- ・ケージから出すときは、必ず教室の出入り口を閉めるなど、逃げ出さないように配慮する。

## (3)エサとその与え方

- ・1日1回、同じ時間に一定量のエサを与える。
- ・ハムスターは雑食性であるが、好き嫌いが激しい。粗食にも耐えるが、栄養のバランスがとれるような食べ物の与え方が大切である。市販のハムスターフードや野菜、野草、果物、種子・穀物、動物性食品等をバランスよく与えるように心掛ける。
- ・エサは頬袋に詰め込み、巣の中に運んで夜ゆっくり食べる。一定量のエサを与え、なくなっても追加しない。いつでも水は飲めるようにしておく。

### 【野菜】

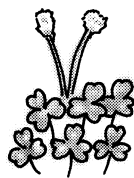
野菜はきれいに洗い、水をよく切って与える。

### 【野草】

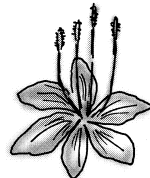
タンポポ、クローバー、オオバコ、ナズナなどを好む。観葉植物は与えてはいけない。



タンポポ



クローバー



オオバコ



ナズナ

### 【果物】

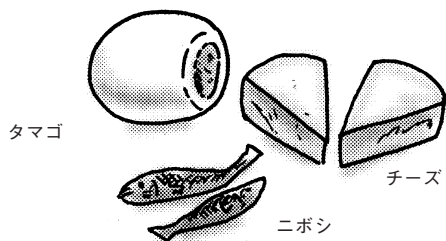
イチゴ、リンゴ、バナナ、ブドウなどを好む。

### 【種子・穀物】

ヒマワリ、クルミ、トウモロコシ、ピーナッツなどを大変好む。

### 【動物性食品】

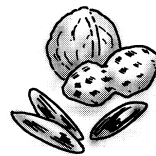
成長期には特に必要である。パンは、頬袋のなかで発酵するので好ましくない。



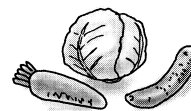
タマゴ

チーズ

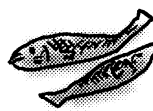
ニボシ



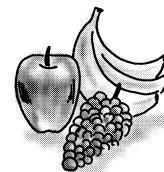
穀類 10 g



野菜 10 g



煮干し 3 g



果物 少量

▶固形飼料は1日1匹当たり10 g程度でよい。(マウス用固形飼料として市販している。)

▶固形飼料だけで飼うときでもときどき野菜などを与える。

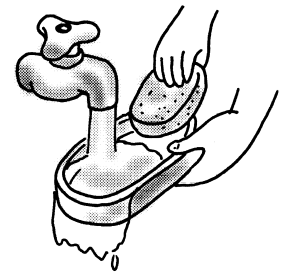
(4)掃除の仕方

- ・掃除をするときは、ハムスターを起こさないように静かに手早く行う。
- ・野菜などの食べ残しを取り除く。
- ・トイレやケージが汚れていたらきれいにする。
- ・食器を洗い、必ず水気をふき取る。
- ・水を毎日取り替える。



【週に一度はケージの大掃除】

- ・ハムスターを安全な他の場所に移す。
- ・巣箱を掃除する。種子、穀物等は少し残しておく。
- ・敷床を交換する。床に敷いてある新聞紙等を新しい物と替える。  
トイレの砂は毎日取り替える。
- ・食器、給水器を洗う。すみずみまで洗い乾燥させる。
- ・ケージ、附属器具を洗う。洗った後、十分乾かす。



(5)飼い始めの接し方

<買って来た日>

- ・新しい環境に緊張しているので、触らないでそっとしておく。

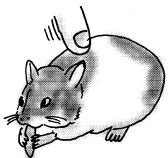
<2～5日目>

- ・まだ緊張しているが、声をかけたり指でそっと触ってもよい。

<1～2週間>

- ・優しく抱いたり、ケージの外に出したりしてもよい。

<なでかた>



- ・エサを食べてリラックスしているとき、頭から背中の方になる。

<手のひらへの乗せ方>



<抱き方>



- ・正面から持ち上げ、優しくしっかりとつかむ。強く握りしめてはいけない。

## 4 出産と世話

### (1)繁殖の時期

- ・自然環境に近い飼い方をしていれば、春と秋に繁殖しやすい。しかし、いつも暖かい部屋で飼っている場合は、1年中発情期が続くこともある。すぐ妊娠するので、出産させたい時に相性に注意しながら1つのケージに入れるようにする。
- ・交尾適齢期は、ゴールデン・ハムスターの場合、雄は生後10週以上、雌は8週以上である。



### (2)妊 娠

- ・妊娠期間は15～16日位で、10日目ぐらいになると下腹部が大きくなるので妊娠したことがわかる。
- ・妊娠した雌は気が荒くなるので、雄を別のケージに入れ、単独飼育を行う。
- ・ケージにカバーを掛けて暗くしたり、暗い所に置いたりする。
- ・神経質になっているので、掃除は最小限にして、エサやりも素早く行い、できるだけそっとしておく。エサは栄養価の高い物を与える。

### (3)出産・成長

- ・出産は夜間か早朝が多く、一度に5～8匹の子どもを生む。
- ・授乳期は神経質になった母親が子どもを殺すことがあるので、必要以上に巣をのぞき込んだり、触ったりしないようにする。なお、授乳期間は21～24日位である。

#### 【生まれたて】

- ・体重は2～3g程度
- ・無毛、赤裸

#### 【4日目くらい】

- ・体重が約2倍に増加

#### 【1週間目】

- ・体に毛が生える
- ・水が飲めるようになる

#### 【2週間目】

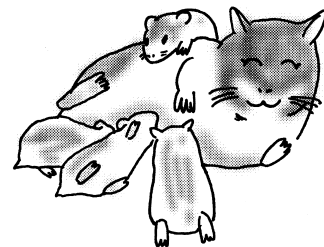
- ・目がひらく
- ・巣から出て、エサを食べ始める

#### 【3週間目】

- ・乳を飲まなくなり、エサを食べる
- ・まわし車などで遊ぶようになる

#### 【4週間目】

- ・巣分けの時期
- ・同じ大きさの子ども同士にわけて飼育する
- ・けんかを始めたならそれぞれわけて飼育する



## 5 ハムスターの病気

### (1)病気の種類

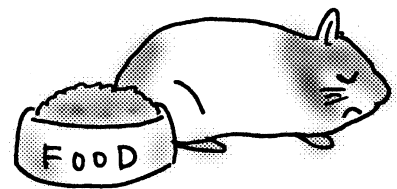
ハムスターは丈夫でありあまり病気にならないが、下記のような病気になることがある

- ・下痢（ハムスターにとって非常におそろしい病気である。）
- ・風邪
- ・皮膚病
- ・熱射病

### (2)病気のサイン

遊んでいるときや世話をしているときによく観察し、下記のような様子が見られたときは注意する。

- ・食欲がない
- ・尾がぬれている
- ・耳がしわしわになる
- ・脱毛があり、皮膚が汚れている
- ・お腹が汚れている
- ・夜、行動しない
- ・ケージのすみでじっとしている



### (3)病気にかかった時

保温につとめ、栄養価の高いエサを与える。

獣医師に相談する。病院に連れていく場合は、日ごろ使っているケージに入れていく。



## ニワトリ・チャボ



### 【ニワトリ・チャボの飼育にあたって】

- 学校でみられるニワトリは産卵用の白色レグホンが多い。チャボは抱卵が上手である。ニワトリは、卵を産むところを観察できるので、飼育動物として適している。
- 元気な雄は、朝の2～3時頃には大きな声で時を告げる。人が寝静まっている頃なので、鳴き声が周囲に響かないように、夜には雄を校舎内や園舎内に入れるようにする。
- 白色レグホン種は子どもたちを追いかけることがある。話しかけたり、トサカをなでたりして可愛がりながら、ニワトリと一緒に生活しているという感覚で飼育することが大切である。
- 雄1羽に対して雌2～3羽を同居させる。けんかを防ぐため、このバランスを保つように気をつける。寿命はニワトリが10年位、チャボが4～5年である。小学校や幼稚園で飼う場合には、温和な性格のチャボかうコッケイを飼育するとよい。

### 1 出産と世話

- ①ニワトリに顔を近付けると目をつつかれることがあるので、顔を近付けないこと。
- ②ニワトリは夏は朝3時、冬でも4時頃にはけたたましく時を告げる。雄が複数の場合には競い合っていていつまでも鳴き続ける。チャボはあまり鳴かない。
- ③飼育小屋の中には、同種のもので雄1羽に対して雌が2～3羽必要である。このバランスを保つことで雄は穏やかに生活できる。
- ④雄同士、雌同士の中にそれぞれ強い者から弱い者へと序列が決まっている。1番強い雄はどのニワトリでもつつき、しかもどの雄からもつつかれぬ。この雄は群を統率して雌への支配ができる。しかし、順位争いが始まると、負けた雄は、群れの周囲に追いやられる。雌にも序列があるので、つつかれて弱ったニワトリやチャボを見かけたら速やかに隔離する。また、つがいで飼う方がよい。
- ⑤群れから離れた雄が、孤独感から人間の子どもたちを追いかけて暴れることがある。性格の穏やかなチャボか、ウコッケイを飼育するとよい。
- ⑥人間に可愛がられるのが好きで、目の回りやトサカをなでてやると、クルルーとうれしそうに鳴き、体を擦り寄せてくる。

## 2 飼い方

### (1)飼育小屋

夏涼しく、冬は日当たりのよい場所を選ぶ。スズメが病気を運ぶことがあるので、網目を細かいものにする。床はコンクリートにし、砂浴びをして、外部寄生虫を落とす習性があるので砂をまいておく。時々砂を取り替え、掃除を十分に行う。常に床は乾燥させておく。他にも

- ・野鳥の侵入や糞尿の落下などを防ぐために、トタン板等の屋根を設ける。
- ・屋根は雨のふり込みを防ぐように切妻にするなど十分にはり出しておく。
- ・とまり木は、ニワトリがにぎれる太さの木を選ぶ。
- ・巣箱は、扉の開くものを用意し、中に新聞紙をしいて毎日とりかえる。月に一度はよく掃除して、虫などが出たら熱湯消毒する。
- ・巣箱は、11月初旬には用意する。ない場合はダンボール箱を代用し、こわれたら新しいものを入れる。
- ・砂箱は、清潔で大きめのものを用意する。

等に留意する。

### (2)エ サ

市販のエサにきざんだ青菜を混ぜて、1日に2回新しいものと取り替える。水は毎日取り替え、容器もよく洗う。

人間によくなつくので、エサを与えるときに、「お待ちどうさま、たくさん食べてね」などと語りかけるとよい。

### (3)排泄物の始末

排泄物が乾燥すると飛散するので、掃除の時に少し水をまくとよい。

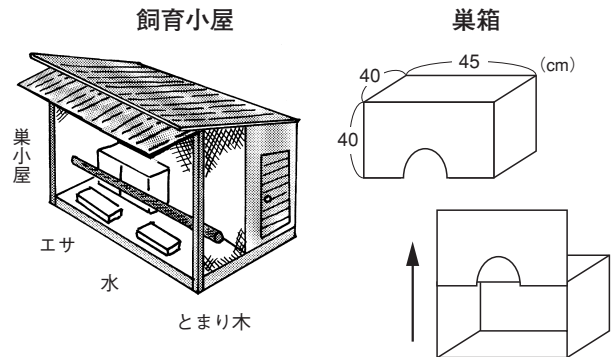
週に1回程度はデッキブラシで掃除する。

### (4)散 歩

ニワトリやチャボを十分散歩させる。日光に十分当たることで丈夫になり、長生きするので、ニワトリ小屋から出して日光に当てる。

### (5)産 卵

ひよこはふ化後4カ月で成鶏となり産卵を始める。白色レグホンは年に300個以上産卵可能であるが卵を温めない。一方、チャボは10数個程度産卵すると抱いて温め始める。産卵しないことがあっても、春や秋になり季節が巡ってくるとまた産卵を開始する。チャボは子育てが上手で、年に2～3回程度抱卵する。



エサと水をとるように気を配ることが大切である。羽ジラミ等の外部寄生虫がついているとひよこに感染するので、虫を除去した上で抱卵させる。

なお、飼育舎の動物の数を増やし過ぎないように、産まれた卵は、自然の恵みとしてその日に子ども達に持ち帰らせ、新鮮なうちに食べる取組も大事である。

### 3 繁殖

成鶏が卵の上にすわり始めたら、卵を温めていると考えてよい。動きをよく見て状況を把握する。卵は3週間でふ化する。ふ化の2日前に卵のなかでピイピイと鳴きだし、雌鶏が外からコッコと呼びかけるといふ行為が見られる。ふ化後、ひよこは2日位で雌鶏と一緒に巣から出てエサを食べ始める。この時に、ひよこ用のエサが必要である。柔らかい青菜を細かく切って市販のひよこ用飼料に混ぜて与える。

ひよこが水に濡れると、体温が下がってしまい死亡することがある。すぐに手で保温し、ドライヤーの弱い気流で乾かす。

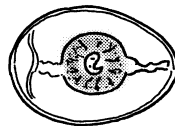
また、ふ化させる際には、ひよこの引き取り手を探してからふ化させる。

#### (1)受精卵の見分け方と卵の変化

抱卵して1週間ごろ、雌がエサを食べている隙に検卵し、無精卵は取り除く。日光か電球にかざして血管が見えるのが受精卵である。

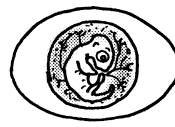
<抱き始め～2日目>

胚の分裂増殖が始まる



<4日～10日目位>

血液の流れが激しくなる



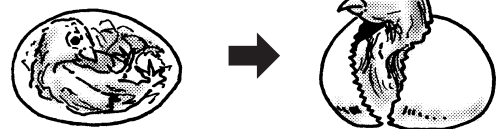
<17日～20日目位>

羽毛がはえ、つばさと足が見える



<21日目>

自分の力で殻を割る



#### (2)生後30日頃までの留意点

ふ化直後は、まだ濡れているがすぐに歩き出す。このころに、卵をゆでて細かく切り、それを与えると元気に育つ。母鶏は虫を探しては虫をくわえて見せて、食べ方を教える。寒くなるとひよこを抱いて世話をする。

雄鶏は、エサを見つけては雌鶏やひよこに食べさせたり、外敵が来るとそれに向かって行く。

普段おとなしいチャボもこの時は人間を攻撃してくるので気をつける。

### (3)生後4～5週間頃の留意点

雌鶏は再び卵を産み始める。また、このころ自分の巣で休息する様子が見られる。子離れの時期を迎えると、ひよこが同じ巣に入るのを嫌がる。子どもたちとともに、子育ての様子を注意深く観察したり、気付いたことを語り合ったりするとよい。

ひよこには、配合飼料や魚粉や貝粉を与える。ビタミンやカルシウムを含む栄養のバランスに気をつける。

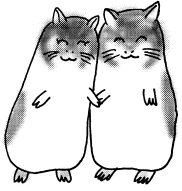
## 4 病気やケガ

エサを食べなくなり元気がない。とまり木にとまったままである。羽毛がひどく抜ける。トサカの色が薄くなったり、黄色味を帯びたり、赤色に変わっている。顔にできものができる。目が開かない。飼育場の隅にうずくまってなかなか立ち上がれない。このような様子が見られたら病気を疑う。

健康状態は、特にふんの様子を観察するとよい。健康なふんは、ほどよい固さで、少し薄黒く、白色の尿が付いている。緑色の下痢は伝染病の場合に多いので注意したい。赤色のふんは寄生虫などによって腸粘膜に炎症を起こしている恐れがある。この場合、血便の有無に注意する。

元気なニワトリは羽につやがあり、動きも敏捷である。かん高い声でよく鳴く。元気がなくて心配なときは、そのニワトリを他の元気なニワトリから離して静かな環境を与えるようにする。また、獣医師に相談し、治療してもらう。





memo

A large, empty rectangular area with rounded corners, intended for writing a memo. The area is bounded by a thin black line.

## 第3章 動物飼育の課題と対策

### 第1節 飼育動物の疾病と対策

動物も人間と同じように病気にかかる。しかし、動物は病気になっても病状を言葉で説明することができないので動物を毎日観察する。そして、いつもと少しでも違ったことが発見されたら、すぐに獣医師に相談するようにする。

#### 1 かかりやすい病気を予防するための一般的な注意

##### (1) 病気の見つけ方

毎日動物の状態を観察し、いつもと違うところはないか見つけて記録する。観察項目を表にして記録することが望ましい。食欲がなかったり、下痢や嘔吐などがあつたら、すぐに獣医師の診察を受けるようにする。特に、ほかの動物に感染する病気は早めの対応が必要である。

##### (2) 繁殖制限（動物を適正以上に殖増させないために）

飼育舎やケージで飼育できる動物の数は限られている。最適な環境で飼育できる頭数をよく考えて雌雄を別にして飼育したり、去勢手術をして繁殖を制限することが大切である。

##### (3) 新しく動物を加えるとき

新しい動物を飼育する場合は、健康チェックをして病気でないことを確認する。もし疑いがあれば獣医師の診察を受け、他の動物と離れたところで2週間ほど様子を見てから一緒にする。

#### 【病気にさせないためのポイント】

- ・ 飼育環境は常に乾燥させ衛生的にする。
- ・ 動物に適したエサを与え、十分な栄養管理を行う。
- ・ エサや水は、毎日新しいものに取り替える。
- ・ 毎日、飼育舎とその周辺を掃除する。
- ・ それぞれの動物の習性を理解し、その動物に適した飼育を行う。
- ・ 愛情をもって動物に接し、ストレスを与えないようにする。

#### 2 かかりやすい病気等の対策

##### 皮膚病と外傷

##### ① 皮膚病

寄生虫により、かゆがったり皮膚の一部が脱毛したりする。購入時にすでに感染している

ことがある。新しく動物を加える時は、獣医師による健康診断を行ってから一緒にするとよい。

湿疹、<sup>かひ</sup>痂皮（かさぶた）、フケなどが目立つときは、早めに獣医師に検査を依頼し、指示を受ける。

・真菌（カビ）によるもの

毛が円形に脱毛したり、皮膚にフケやかさぶたができたり、ジクジクしたりする。動物同士、動物から人へ、人から動物へも感染する。

飼育舎は常に掃除をして、乾いた状態にする。真菌症の動物は隔離して、感染を広めないようにする。外用薬を塗るときは、獣医師の指示を受けるとよい。動物の治療を行った後はヨウ素系消毒剤で手を消毒する。

## ②外 傷

・けんかによるもの

数が多すぎたり、雄が多いとケガが多くなる。

雄を飼うなら1匹がよい。動物がケガをした場合、小さな傷でもヨウ素系消毒剤などですぐに消毒して獣医師に見せるようにする。ウサギは小さな傷でも化膿しやすいので、注意する必要がある。鳥類は体温が高いので、化膿することはほとんどない。

・取り扱い方によるもの

乱暴な扱いによってケガをすることが多い。無理に抱き上げたりすると、不安から暴れて落としてしまう。ウサギ等はわずかな高さから落ちても骨折することがある。それぞれの動物の習性を理解し、動物を不安にさせない扱い方を工夫することが大切である。

・飼育舎などの不備によるもの

飼育舎の床や壁などの釘や床のささくれ、運動場のガラスなど鋭利な破片で足の裏を傷つけることがある。

動物がケガをした場合は、傷口をヨウ素系消毒剤などで消毒して、獣医師の治療を受けさせる。

## 呼吸器や消化器の病気

・感染性の病気によるもの

食欲や元気がなく、呼吸も早くなり、いつもより熱が高い。顔や肛門周囲の汚れ、目やに、鼻水、よだれ、下痢便などに注意する。ウサギは嘔吐をしない。

小さな鳥やハムスターなどは、1～2日の経過で死亡するケースが多いので注意する。

小鳥は暖めるようにする。自分で食べない場合には、水や食べ物を口につけて誘ってみる。全く食べないときにはただちに獣医師の診察を受ける。特に、小鳥の場合は1日から1日半食べないと死亡する。

- ・栄養不足、暑さや寒さ、ストレス（触りすぎなど）によるもの

動物はいろいろなストレスから、エサを食べなくなったり、下痢や嘔吐を起こす。寒暑対策を行い、適正な環境を守る。動物を追いかけて回したり、触りすぎたりしないようにする。

### 繁殖に関係する病気

#### ①子どもや卵を産まない、子どもが育たない

親が病気や栄養不良のとき、また、いろいろな動物と一緒に飼育されていてストレスがあるときなど、親は落ち着いて出産や子育てができない。

1種類の動物を一部屋で飼育し、頭数は雄1に対して雌2～3にするか、繁殖期だけ仲のよい雄雌を一緒にする。

妊娠すると、ウサギはけんかをするので雄と離して別に飼育する。

ニワトリは、巣箱が濡れている床に置かれることをきらうので、巣箱は水のかからない薄暗い落ち着いた場所に置く。

#### ②子どもや卵を産み過ぎる

去勢・避妊手術をしていない雄や雌を一緒にしておくと、次々に子どもを産むことが多いので、雄と雌は別々に飼育するのが望ましい。雄と雌を一緒に飼育していても動物を殖やしたくない場合は、去勢か避妊手術をする。

## 3 飼育動物の病気とその対策

### ウサギの病気

#### ①毛球症

ウサギは嘔吐ができないので、胃の中に毛球がたまることがある。

#### ②歯の伸び過ぎ（不正咬合）

前歯と奥歯の噛み合わせが悪くなると、エサをとることが出来なくなるので、獣医師に相談する。

#### ③皮膚糸状菌症

カビによって、頭、耳、足、指の付け根の皮膚にフケがでたり毛が抜けたりするので、獣医師の治療を受ける。動物を別の場所に移して、飼育舎を塩素系漂白剤を薄めたもので消毒する。

#### ④耳のよごれ

ダニが耳に寄生して、耳に黒い耳垢（耳あか）が多量にたまって赤くただれてくるので、耳の中をよく観察する。複数飼育の場合は、感染したウサギが完全に治るまで別にしておく。獣医師による適切な治療で簡単に治る。

⑤スナッフル症

鼻水、くしゃみなどのカゼの症状が起こり、首を傾けたりすることもある。湿度が高いと細菌感染を起こしやすいので、飼育舎は常に乾燥と清潔を保ち、風通しのよい場所で飼育する。

⑥下痢（コクシジウム症）

コクシジウムが寄生して下痢を起こす。すべてのウサギのふんを獣医師に依頼して検査をする。適切な治療により確実に治る。

⑦鼓腸症（腹部が膨らむ）

腸内ガスが発生し、お腹が膨らむ。腐敗したエサを与えたり、エサの種類を急に換えたりすることが発症につながるので、繊維質の多い物を常に与える。エサを変える場合は少しずつ混ぜながら慣らしていく。

⑧ケガ

けんかなどによる小さな傷から細菌が入り込み、皮下に膿がたまって腫れ上がることがある。雄は複数で飼育するとけんかをするので、去勢手術を行うか、単独で飼育する。傷を見つけたらヨウ素系消毒剤などで手当てをする。

⑨下半身麻痺

抱いている人が落下させたり、無理に抱こうとしてウサギが暴れたりした時、背骨が折れることがある。後足が麻痺し、排尿や排便ができなくなる。

正しく抱くようにする。また、歩き方に異常が見られたら早めに獣医師に診察してもらう。

ハムスターの病気

①脱毛

栄養のバランスが悪いと脱毛することもあるので、食事に気をつける。ニキビダニ（毛包虫）の寄生による脱毛もある。

②下痢

腐敗したエサ、環境の変化、細菌、真菌、寄生虫などの感染によって下痢をすることがある。

③目やに、目が開かない、目の周りの汚れ

結膜炎、床敷のほこり、噛み傷などが原因となる場合が多く、歯の疾患が原因となることもある。ハムスターは体調が崩れると目やにが多くなる。

飼育舎の衛生環境を改善する。原因疾患の治療が必要になるので、獣医師の診察を受ける。

④体重減少

歯の不正咬合、栄養欠乏、温度管理、腸炎、肝疾患、腫瘍（ガン）などが原因と考えられる。

⑤ケガ

相性が悪いとけんかし、ひどい時は相手を殺してしまうこともあるため、ハムスターは

基本的に単独で飼育する。

雄より雌のほうが気性が荒く、特に妊娠中、授乳中の雌は必ず個別飼育にする。

#### ⑥疑似冬眠

5℃以下の低温状態で疑似冬眠が起こり、体温が下がり寝ている状態が続く。冬場の夜半から明け方は急に冷え込むことがあるので、保温管理に気を付ける。これは病気ではないが、病気で衰弱していても同じ様な状態になるので、注意して観察する。

よくわからない場合には、獣医師に相談する。

#### ⑦足の外傷、骨折

不適切な飼育ケージやけんかなどでケガをすることがある。

回し車の位置を変えたり、金網の隙間の間隔などを改善する。獣医師の診察を受ける時は、ケージも持参して原因を究明する。また、治療後の看護についてもよく説明を受ける。

#### ⑧子どもの死亡、子育て放棄

ストレスを与えたり、産まれた子どもに人の臭いをつけたりすると、子どもを食べたり、子育てをやめたりすることがある。

母親は神経質になっているので、出産後はしばらく子どもや巣箱をのぞいたり、むやみにいじったりしない。適当な巣材や隠れ場所を与え、静かな環境と十分なエサと水を与える。

### モルモットの病気

#### ①皮膚病と皮膚の腫れ

長毛種に起こりやすく、タンパク質の含有率の低いエサが誘因となることがある。妊娠の後期や、繰り返し出産する雌、不衛生な飼育環境、継続的な摩擦による被毛の喪失、けんかによる咬傷（噛まれた傷）、ハジラミ、ダニなどの寄生、真菌症あるいは細菌性皮膚炎などが原因として考えられる。

皮膚が盛り上がった腫れている場合は、腫瘍、膿瘍（うみがたまる）が多く、壊血病から起こる関節の腫脹（腫れ）、関節炎、乳腺炎なども考えられる。

モルモットはビタミンCを合成することができないので、普段からビタミンCを多く含むエサ（ニンジン、キャベツ、柑橘類<sup>かんきつ</sup>など）を与える。

#### ②流涎（よだれ）

歯の過長による不正咬合や口内炎などによって起こるが、ビタミンCの欠乏によるコラーゲンへの影響が原因であることも考えられる。

#### ③体重減少

モルモットは、特に新しいエサや環境を嫌うことがある。また、タンパク質の欠乏、胃腸疾患、歯の不正咬合による食欲減退、ビタミンC欠乏などが原因で痩せてくる。

④運動失調、麻痺などの神経症状

一般的には、落下による骨折、神経、軟部組織の損傷、ビタミンC欠乏、全身性疾患、骨関節炎などが原因となる。

⑤子どもの死亡

母親の経験不足、騒音や活発な同居モルモットなど飼育環境の不良、乳腺炎などが考えられる。また、出生体重が60g以下で産まれた子どもは、生後数日以内に死亡することが多く見られる。

**インコ（セキセイ、オカメ）、ジュウシマツ・ブンチョウ・カナリヤの病気**

鳥は病気を隠すといわれ、様子をよく観察していなければ病気を発見できない。エサの食べ具合や水を飲む量、ふんの状態と回数、鳥の姿勢や動作、目の輝きなどに注意して観察する。

具合が悪くなると、全身の羽毛を膨らませ（膨羽）、体を丸くしてじっとしている。目を閉じかけて、あまり動かず、エサや水をとる量が少なくなる。また、下痢や便秘になったり、鼻水で鼻の周りが汚れることもある。

病気の鳥を他の鳥から別の場所に移して、ひよこ電球などで暖める（25～30℃が適当）。また、栄養のあるエサと新鮮な水を与え、早めに獣医師の診察を受ける。

①カイセン症（トリヒゼンダニ感染症）

カイセン症はセキセイインコに多い病気である。多くの場合、くちばしや足が感染して、かゆがり、羽毛も抜ける。

②真菌症

円形の脱羽がジュウシマツ、ブンチョウなどに多く見られる。早めに獣医師の診察を受け、ほかの鳥への感染防止に努める。

③毛引き症

環境の変化が生み出すイライラや退屈などが原因で、自分で羽をむしってしまう。飼育環境に配慮して、できるだけストレスを与えないようにする。

④栄養性脚弱症、爪の過長

脚弱症はひなや若鳥のビタミン、ミネラル類の不足から起こる。足を上げたり、歩き方が異常であったり、止まり木につかまることができなくなる。

ビタミンの豊富な青菜（小松菜、チンゲンサイなど）の他、ミネラル源としてボレー粉、塩土なども与える。また、獣医師に総合ビタミン剤を処方してもらってもよい。爪が伸びすぎた場合（過長爪）は、爪の中に透けて見える血管の部分避けて先端を爪切りなどで切る。

## ⑤下痢

青菜の与え過ぎや、水分のとり過ぎ、ストレスによっても下痢を起こすが、コクシジウム（原虫）や細菌、カンジダ（真菌）、ウイルスなどの感染によっても発症する。

下痢をしている鳥の排泄物の検査を獣医師に依頼する。感染症であることがわかった鳥は別のケージにわける。

## ⑥嘔吐

一度に大量のエサを食べさせると吐いてしまうことがある。成鳥では、人間の食べ物（パン、うどん、ご飯など）を与えたときに嘔吐しやすいので注意する。

栄養障害やカンジダ症、トリコモナス症などによる<sup>のう</sup>囊炎を起こし嘔吐することがあるので、獣医師に原因の究明と薬の処方をしてもらう。

予防にはビタミンAが豊富なエサを与える。

## ⑦咳、くしゃみ、呼吸困難

気道炎、鼻炎、トリコモナス症、副鼻腔炎などいろいろな感染症によって起こる。腹水がたまって呼吸が苦しくなる。異常がみられたら獣医師に相談する。また、毎日の飼育管理（エサ、衛生環境など）をきちんと行い、病気に対する抵抗力をつけておくことが大切である。

## ⑧卵詰まり

卵詰まりは起こりやすい病気で、総排泄腔が膨れてくる。卵をつぶさないように取り出すために獣医師の処置が必要である。

親鳥には寒さや急な温度変化に気を付け、ビタミンの豊富な青菜、カルシウムを多く含むボレー粉、イカの甲や塩土を十分に与えて、産卵する体力をつけさせておくことが大切である。

## ニワトリ、チャボの病気

全身の羽毛を膨らませ（膨羽）、眼を閉じかけて、あまり動かず、体を丸くしてじっとしている。エサをあまり食べず、下痢や便秘になったりする。鼻水で鼻の周りが汚れることもある。

病気のニワトリを別の場所に移して、ひよこ電球で暖める（25～30℃が適当）。栄養のあるエサと新鮮な水を与える。

## ①下痢

細菌、ウイルス、寄生虫、原虫などの感染によって下痢便がみられる。ひな白痢（サルモネラ感染症）は、生後1ヵ月未満のひよこが白色のねっとりした下痢便を排泄し、死に至る。

ニューカッスル病は、緑色の下痢をして、非常に衰弱の激しい症状となる。死亡率の高い伝染病なので、ワクチン接種による予防を行うことが望ましい。



ひな白痢、ニューカッスル病は、家畜伝染病予防法の対象なので、特に獣医師の診断が必要である。普段から排泄物の状態をよく観察して、異常があったら獣医師に検査を依頼し、治療を受ける。

②卵詰まり

卵が卵管に詰まるため、お腹が膨れる。羽を膨らまして、呼吸が速くなる。食欲もなくなり、下痢便をしたり便秘になったりする。異常があったら早めに獣医師に相談する。

③外 傷

ニワトリ同士のけんか、ネズミや猫などによる噛み傷などがある。一般には、鳥類は外傷には強く、化膿は少ない。しかし、ネズミや猫による噛み傷では、傷が浅くても敗血症で3～5日以内に死亡することがある。

④ハジラミの寄生

羽毛の外見が悪くなり、多数寄生している場合には羽が抜けることがある。また、羽軸に白くキラキラ光る卵が付着しているのが見られる。

少数寄生の場合は、ピンセットなどで1匹ずつ取れるが、多いときは獣医師に処置してもらう。

**病鳥の一般的な看護法**

ア) 隔 離

他の鳥への感染防止のために、隔離して排泄物や症状をよく観察しておく。

イ) 安 静

安静にして、体力の消耗を防ぐ。止まり木はできるだけ低くして、水やエサをとりやすい位置にする。

ウ) 温 度

体温が低下している（羽を膨らませた状態が続いている）ときには保温する。保温は60～100Wの白熱球、スタンド電球、ひよこ電球などを利用し、鳥かごの左右一方向に置く。温風を吹き出す器具での保温は避ける。

エ) エサと水

膨羽症状がなくなれば、多くの病鳥は自力で飲食を始めるが、床面にエサをまいて採食を促す工夫をする。また、採食しやすいように明るさを保ってやる。

**4 人獣共通感染症 (zoonosis)**

(1)人獣共通感染症とは

人獣共通感染症は、ギリシャ語の動物(zoo)と病気(nosos)を連結した英語の邦訳で、人畜共

通感染症もしくは人獣共通伝染病とも訳されている。WHO（世界保健機関）では「脊椎動物と人との間に自然に移行しうるすべての病気または感染を指す」と定義されている。

人獣共通感染症を、動物から人への感染経路で分類すると以下の3経路に分けられる。

- ① 動物が病原体の自然宿主であり、動物の体内で病原体が増殖し、病原体は尿中やふん中に排泄され、人への感染源になり得る。しかし、動物自体は保菌者であっても外見的には全く健康で不顕性感染である場合（野生げっ歯類のハンタウイルスなど）。
- ② 感染動物が自然宿主と終末宿主の中間的存在である。媒介をする動物は本来の保菌者ではないが、病原体の生態サイクルに入る場合（日本脳炎は、ブタから蚊を媒介として人に感染する人獣共通感染症であるが、法定伝染病として通常は公衆衛生で扱われている）。
- ③ 終末宿主として、病原体に感染し発症する場合。自然界では持続的に感染源になることはないが、潜伏期間中や発症中に人への感染源となる（狂犬病など。この場合は、動物も劇症を示すので飼育者も容易に気づく）。

## (2)人獣共通感染症を防ぐには

学校で飼育されている動物で、現実的に問題となり得るのは、狂犬病やエボラウイルスなどの市民生活を脅かすようなものではないので、あまり神経質になる必要はないが、感染経路を防ぐことを考えて次の項目に注意するとよい。基本となるのは人と動物双方の健康と衛生管理である。

- ① 新しい動物を飼い始めるときには、2週間位の観察期間を設ける。
- ② 飼育舎を掃除した後、動物に触れた後、排泄物に触れた場合は必ず石けんで手を洗う。
- ③ 飼育舎にネズミや野鳥が侵入しないように気をつける。
- ④ 動物に口移しでエサを与えたり、食器を共用しない。
- ⑤ 動物に噛まれたりひっかかれたりしたら、すぐに傷口を消毒して養護教諭等に報告し、その後の指示を受ける。
- ⑥ 飼育舎の卵などを勝手に持ち出さない。
- ⑦ 飼育動物に異常があったら病気が考えられるので注意する。
- ⑧ 異常な死に方をした場合には、獣医師に検査を依頼して原因を確かめ、適切な遺体処理を行なう。

なお、イヌ、ヤギ、ウサギ、ニワトリ、アヒル、ウズラなどの動物種では、家畜伝染病予防法により、獣医師もしくは動物の所有者が病気を発見した時には、家畜保健衛生所に届出なければならない疾病が規定されている。この意味からも、動物の病気・死亡に関しては獣医師に相談することが大切である。

## (3)学校飼育動物で対象となる主な人獣共通感染症

### ① ニューカッスル病

ニューカッスル病ウイルスはニワトリでは伝播力が強く死亡率も高いので、畜産経営

上重要な疾病として家畜伝染病予防法の対象になっている。ドバトなどの野鳥により伝播することがあり、人に対しては重い疾病を引き起こすことはないが、汚染された手で眼をこすったときに角膜炎を起こすことがある。

② パスツレラ症

人以外の口腔内常在菌による感染症である。イヌ、ネコの咬傷による外傷型と呼吸器感染症、敗血症などの非外傷型に分けられる。ウサギに口をなめさせない、ペット動物といっしょに寝ないなどの基本管理が必要である。

③ オウム病

オウム病は呼吸器感染症で、発熱や咳などの風邪の症状から異型肺炎に至り、重症では死亡することがある。インコ、オウムやハトが感染源となる。

④ 皮膚糸状菌症

皮膚糸状菌症は、病原性糸状菌と総称される白せん菌や小孢子菌、あるいはカンジダの感染による皮膚疾患である。学校で飼育される動物では、皮膚糸状菌症にかかった（皮膚の脱毛部やただれがある）ウサギやモルモットなどの哺乳類との接触による感染に注意が必要である。

⑤ トキソプラズマ症

トキソプラズマ原虫はネコ科動物が固有の宿主であるが、人や家畜が中間宿主となり発症することがある。人で問題になるのは、妊娠初期の妊婦が胎盤感染を起こした時の新生児脳炎である。妊婦がトキソプラズマ抗体陽性であっても妊娠初期の感染でなければ問題はない。ブタやヒツジ肉を生で食べない、ネコの排泄物の始末をきちんとするなどの基本管理を心掛ける必要があるが、疫学的にはネコからの感染は稀であると考えられている。

⑥ ネコノミ症

ネコノミが、学校のウサギに感染する例がある。主に人の膝から下の部位を刺傷し発疹や強いかゆみを引き起こす。ウサギもかゆみにより脱毛が起こるので注意が必要である。ノミ駆除対策は獣医師にプログラムを立ててもらいとよい。

(4)人獣共通感染症の理解のために

① 感染・汚染・病原体

微生物が宿主の体内に侵入して、増殖する状態が起こったときに感染が成立したという。微生物が付着しただけの場合は汚染という。宿主が感染していても、症状が出ずに外見的に感染していることが判らない状態を不顕性感染という。病原体を排出している人や、動物及び病原体で汚染されているものがすべて感染源になりうる。

② 感受性

ポリオウイルスは、ヒトやサルには感染するが、マウスには感染しない。ボルデテラは

ウサギにとっては軽症もしくは無症状であるが、モルモットには重篤な感染症となる。このように微生物と宿主の間には、もともと感染が成立する組合せと、そうでない組合せがあり、これを感受性という。

### ③ 滅菌・消毒

滅菌とは、対象とする物体（または範囲）に存在するすべての微生物を完全に殺してしまうか除去してしまうことをいう。したがって、滅菌が行なわれると対象物（範囲）には一切の生命体がない状態になる。消毒とは病原性の微生物を念頭におき、その危険性を取り除くための処理をいう。したがって生き残っている微生物がいたとしても、危険性が無視できるようなら、それは問題にしない。

## 参考文献

「看護テキスト微生物学」（1992）小田紘 廣川書店

「シンプル微生物学」改訂第3版（2000）東匡仲、小熊恵二編 南江堂

「人畜共通伝染病について」、獣医師の眼、総合看護28-4、29-1、29-2（1993、1994）桜井富士朗・荒島康友・植田富貴子 現代社

「学校飼育動物と人獣共通感染症」、MVM Vol.8-1（1999）吉川泰弘 ファームプレス

## 第2節 学校における動物飼育の工夫

### 1 休日や長期休暇中の世話

学校が休業日だからといって、どの生き物もずっと眠ってくれるわけではない。平日だけ世話をするのでは、生き物を飼育することに対して身勝手な心を育ててしまうことにもつながる。また、学校が休みのときに、子どもが世話をしに来る場合でも、持ち帰って世話をする場合でも問題は出てくる。学校が、各地域の事情も照らし合わせて休日飼育を考える必要がある。次の事例を参考に、各学校が地域の実情に合わせて工夫することが必要である。

なお、いずれの場合においても、動物と子どもの両者に対して適切に安全が確保されるよう、管理体制の整備が不可欠である。

#### (1)持ち回り制

クラス単位で飼育しているハムスター、鳥などの小動物の場合、子どもたちの持ち回り制で飼っている学校がある。月の初めに、みんなで話し合って順番を決める。基本的に、一度持ち帰ったら、全員が一巡するまで待つようにする。ただし、途中で希望しない子どもが出た時は、他の子どもが希望できるようにする。持って帰り、世話をすることで、動物に対する愛着が深まることが多いようである。

この方法では、ハムスターぐらいまでの大きさに限られるし、各家庭の事情や次にあげる問題点もある。学校だけではなく、保護者の理解や協力が必要になってくる。

#### 問題点

##### ○突然都合が悪くなったときどうするか。

前日までに、都合が悪くなった場合、その子どもが責任を持って代わりの子どもを探すようにする。担任も帰りの会で呼びかけるなど支援していく。

##### ○病気になったり、死んだりしたとき

病気や死を心配して、反対する家庭も多い。持ち帰った時に、偶然死んだりすれば、子どもは、飼育することを恐れるようになり、教育上逆効果になる可能性も高い。

- ・ 病気のときは、子どもに持って帰らせないで、担任が世話をするようにする。
- ・ エサの与え方や適切な環境について、みんなで話し合いながら、周知しておく。
- ・ 問題が起こる前に、命について話し合う。どんな生き物の命にも限りがあることをみんなで考えることは命の尊厳にもつながる。保護者にも保護者会を利用して、子どもたちで話し合った様子を報告し、理解を求める。
- ・ 獣医師会に依頼して、学校単位で講習会を開いてもらう。保護者も含め、動物について理解するよい機会にする。

## (2)休日当番制

ウサギぐらいの大きさになると、子どもが持って帰るのは難しい。そういう場合、当番を設ける学校が多い。

休み単位で当番を考えるのもよいが、一月ごとに担当クラスを決めると、忘れることが少ないようである。簡単に健康状態を書けるような日誌を作ると忘れにくくなるし、動物の様子を把握することもできる。学校の基本計画のもとに学年により分担を決める学校もある。生活科で飼育する場合、児童会活動の飼育委員会で飼育する場合などさまざまな方法が考えられるが、それぞれの学校の事情に合わせて当番を決めていきたい。

### 問題点

#### ○安全管理上の問題はないか

- ・複数の子どもで当番を組むようにする。
- ・親子で、散歩がてらに来られるような雰囲気を作る。
- ・時間を決めて教師も顔を出すようにする。

## (3)地域との協力

何から何まで学校でやろうとすると負担が増え、生き物を飼う意欲を教師が失ってしまう。面倒だという思いに支配されては、子どもの心にも悪影響を与える。そういった問題等も踏まえて地域とうまく協力して飼育する学校もある。

- ・PTAや子ども会の活動に取り入れる。
- ・ボランティア活動の一環として組み込んでいく。
- ・地域の住民等で協力してくれるところを探す。
- ・地域の協力を得る場合は、啓発活動が必要になってくる。
- ・授業参観で、飼っている動物と遊びながら授業を行う。
- ・入学当初、親子で動物と触れ合う機会を設定する。
- ・獣医師会に依頼して講師を呼び、動物に関する講習会を開く。
- ・「学校だより」に、毎回動物の近況報告（子どもの作品、作文）を載せる。
- ・よく世話をしてくれる人たちに、子どもたちが感謝の手紙を送る。

こうした活動を通して、地域にも理解を得ていく。その地域全体で、動物飼育に対する関心を高めることは、学校で飼っている動物に対するいじめ、いたずらなどを減らしていくことにもつながる。

## (4)その他

これ以外にも、教職員が当番を組んで行う学校もある。担当の教職員だけでは負担が大きいため、全校での取り組みにする必要がある。小規模校ほど、担当教職員に任せる方法では負担が増えてしまう。また、「子どもたちに飼育をとおして教育を」という動物飼育の教育上の目的を考えた場合にも問題がある。

## 2 望ましい飼育舎と改善の方法

飼育舎については、第2章第3節「動物飼育の例」のなかで、それぞれの飼育動物ごとに概要が記述されているので、その節を参照されたい。

動物を飼育することは、動物を展示することではない。動物が人とともに暮らしていることを知ることであり、子どもが動物と交流するための機会を設けることなのである。

したがって、多種の動物を数多く飼育することは望ましくない。多くの動物を狭い飼育舎に押し込めると、争いのもとを作ることになり、飼育舎のなかで悲惨な状態が生じることになる。この状態を子どもが見ると、教師に対する不信感を助長することになったり、動物の辛さにも無関心になり、ひいては他人に対するいたわりの気持ちや慈しみの心も育たないという悪影響をもたらすおそれもある。

ここでは、基本的な飼育舎の設置場所や外敵を防ぐための工夫、現状の問題点とその改善などについて記述する。

### (1)飼育舎はどこにつくるか

動物の飼育舎は、子どもたちが動物と絶えずかかわり、親しみが感じられるような場所に設置することが望ましい。例えば子どもたちが出入りする昇降口の近くなどに設置し、絶えず子どもの目が行き届きやすくし、短い休憩時間などにも立ち寄ることができ、動物の様子や行動が観察できるようにしておくことなどが考えられる。

一方、動物の健康を考慮して、日光がまったく当たらない場所とか、冬になると冷たい強い北風が吹きつけるような場所は避ける。

飼育舎に隣接して、動物のための運動場が作れるような広い場所が望ましい。動物の運動場があれば、子どもたちとの交流の場として利用できるし、掃除のときにも、動物を安心して出しておける。

なお、住宅密集地での飼育舎の設置は、異臭や鳴き声などで周りの住民から問題視されることがないように十分に配慮する。

### (2)外敵を防ぐにはどうするか

飼育動物の外敵としては、イヌ、ネコ、イタチ、ネズミなどがおり、飼育動物をねらって侵入するものや、飼育動物に与えたエサを食べに侵入するものなどがいる。また、人間がいたずらのために入り込むこともあるので、いずれにしても侵入を防ぐことが大切である。

なかには、飼育舎の囲いの金網が破られ、飼育動物に危害が加えられる場合もある。そこで、飼育舎は、子どもたちや教師の目に付きやすい場所に設置することが大切であり、外部からの侵入を防ぐ配慮が必要である。例えば、金網を二重にしたり（内側は、目が小さく細かい針金でできているものでよいが、外側は、目が粗くても大人の力で破られない金網を使用する）、扉も二重にしておくといよい。

なお、犬は金網を破って飼育動物を襲うことはないが、猫による被害は頻繁に起こるので、

金網の強度と網目の大きさに注意する。小鳥の飼育舎は、金網を二重にしたり、出入り口には、副部屋（サブルーム）をつくり、外部に逃げ出すことを未然に防ぐ構造が望ましい。

### (3) どのような飼育舎をつくるか

種類の異なる動物を一緒に飼うことを避ける。動物ごとに仕切りを設けるようにする。

床は、地面よりも高くして湿気を防ぐようにし、床材は防水コンクリートにしておき、一部分は盛り土にしておくようにする。

土は、動物の皮膚に付いた虫などを自分でこすり取るためにも必要である。ただし、1カ月に一度は土を取り替えることを心掛けたい。

床面は、排水のために南方向に傾斜を付け、南側に浅い排水溝を設けるようにする。こうしておくと、掃除もしやすい。

排水溝は各部屋を通り外部に出す。汚水が排水の吸い込み口に落ちる前に、毛玉やゴミが取れるように工夫したい。

掃除は、できれば毎日行うことが望ましいので、給水が簡単にできるように飼育舎の内部に水道の栓を設置する。また、排泄物や汚れた敷物などが簡単に流せたり、取り出せるように入口を広くするとよい。

### (4) 小さな工夫を

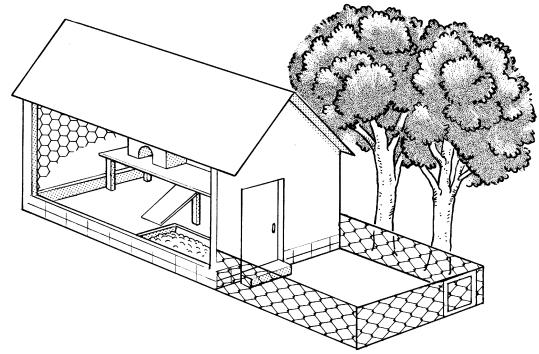
小動物は暑さ寒さの温度変化に弱い。特に夏の暑さや冬の冷たい北風に対して、飼育舎中の動物を守ってやることを心掛けたい。飼育舎に日光が差し込むことは必要であるが、夏は極度に暑くなると思われるので、飼育舎の周りによしずを立て掛けたり、風通しをよくするために大きな窓を作るなどの工夫が必要である。

また、冬は飼育舎の金網をダンボール紙やビニールで覆ったり、飼育舎の中に棚を作り巣箱を設置するなどして、冷たい北風が動物に直接当たらないように工夫することが大切である。

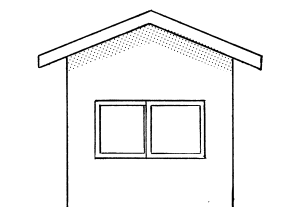
雨の吹き込みを防ぐには、ひさしを十分伸ばすことが必要であるが、北側は全面壁にして雨の進入を防ぐようにしたい。

飼育舎を新しく設置したいときや、いろいろな問題点が生じたときには、近くの獣医師に相談することが望ましい。

飼育舎の例



雨の吹き込みや  
直射日光を防ぐ切妻





### 3 飼育経費

動物の飼育にかかる経費は主に次のようなものがあるが、各学校でその予算の組み方についてはさまざまである。

- ・ 毎日のエサ代
- ・ ケガや病気のときの治療費
- ・ 飼育舎の保全・修理費

#### (1)エサ代について

動物によってエサの経費はまちまちであるが、実際にどこからその予算を出すかということとは現実的な問題である。

エサ代については、各学校の予算の中に経費として計上することはもとより、学校の実情に即して適切に調達するといった方法などが考えられる。

#### (2)ケガや病気の治療費

1回の治療費が数千円（場合によっては1万円以上）かかり、その資金の出所に苦勞しているのが現状である。そのため、少々のことでは動物病院へ連れていかない場合が多いので、手遅れになる傾向がある。

自治体によっては獣医師会との話し合いを持ち、予算化している例もある。地元の自治体と獣医師会が連携して、予算措置している場合は安心して病気やケガに対処していける。しかし、病気が発生してから対応するのではなく、予防を重視することが極めて重要であり、日頃から地域の獣医師会や獣医師に相談することが大切である。

#### (3)飼育舎の保全・管理

飼育舎の保全・管理についても、エサ代と同様に各学校において適切に経費を計上することが望ましい。

### 4 増え過ぎの防止

子どもたちが飼育動物をかわいがり、熱心に飼育すると、生き物の誕生に出会う機会も多くなり、感動的なドラマが展開する。しかし、増え過ぎるために起こる問題も多い。

例えば、動物の数が増え過ぎ、飼育に困って処分せざるを得なくなったとか、狭い飼育舎の中に20羽以上のウサギが詰め込まれていたとか、増え過ぎて死んだ動物が床の上に散乱しているなどの問題も指摘されている。

ウサギやハツカネズミ、ハムスターなどは、自然にまかせていると急増することがある。例えばウサギは去勢手術をしなければ1ヵ月の妊娠期間で5～6羽の子ウサギが生まれ、その子ウサギが生後5ヵ月で母親と同様に出産を始め、また5ヵ月後には孫ウサギを出産するという。ハツカネズミにいたっては、生後6～7週間ぐらいで出産可能になり、1匹の雌が年間100匹以上も産む。ハムスターは、1年中発情期が続き、生後10週間ぐらいで繁殖適齢期になり、平均8匹

程度の子どもを産む。

当然、このようなことから、放置すると増え過ぎて飼育に困る事態が確実に生じる。

大切なことは増え過ぎないように事前の対策を講じることである。繁殖させることを指導計画上に位置づける場合は、増えた動物の飼育についても計画をあらかじめ立てておくことが必要である。また、通常は雌雄を別に分けるか去勢・避妊手術を行う。万が一増え過ぎてしまったときには、各学校が情報を交換して、飼育に余裕のある学校に分けたり、里親制度を設けたりして、他の場所で飼育してもらうこと等が考えられる。動物飼育をとおして地域の学校が情報を交換し合い、子どもたち同士が交流できるようにすることも望ましい。

## 5 近隣に及ぼす迷惑とその対策

### (1)ニワトリの“とき”の声

近隣からの苦情の多くは、早朝のニワトリの鳴き声である。ニワトリはかなり騒がしい生き物なので、住宅密集地域で飼育する場合には、この鳴き声で迷惑がかからないように工夫する必要がある。

ニワトリは、早朝から鳴き出し、夏は朝の3時、冬でも4時頃には、けたたましく“とき”を告げ、雄が複数の場合には競い合っている間でも鳴き続ける。周囲に住宅がある場合には問題になることがある。

そこで、飼育小屋の中に扉の閉まる巣箱を備え、夕方から明朝までニワトリをその中に入れるようにするとよい。翌朝、エサやりのときに出すようにする。なお、ニワトリは夕方になると自分で巣箱に戻るようになる。

また、飼育小屋が狭くて中に新たな巣箱がおけない場合には、校舎内の昇降口などに別の巣箱を用意し、夕方になったら飼育小屋から校舎内の巣箱にニワトリを移すようにする。そうすれば、鳴き声を出しても近隣へ迷惑がかかることは少ない。

住宅密集地域であっても、ニワトリを抱いてその温もりに触れることや、採卵したり孵化させたりして、ひよこから飼うことによさに着目してニワトリを飼育することも考えられる。その際は、鳴き声が小さいチャボを飼育することも考えられる。

### (2)エサの腐敗や排泄物などによる悪臭

ウサギやニワトリなどに与えたエサの残りが腐敗して悪臭を発したりして、近隣から苦情が出ることもある。特に夏の暑い季節には、食べ物の腐敗が進み、悪臭が発生しやすくなる。

そこで、エサを与えるだけでなく、必ず食べ残しの始末も行うようにすることが大切である。食べ残しの始末は、近隣の苦情対策という意味だけでなく、動物の健康管理のうえからも重要である。飼育動物のエサや飲み水を置きっ放しにせず、きちんと後始末することで衛生が保たれ、病気になる率が大幅に下がり、動物たちの寿命が伸びることも期待できる。

さらに、エサだけではなく、排泄物の始末も公衆衛生上重要であり、こまめに掃除するこ

とが有効である。そのためには、飼育小屋が掃除しやすいことが重要である。例えば、ウサギ小屋では、小屋の中に土を入れて、そこに巣穴を掘るような飼い方をしていると、排泄物の始末は容易ではない。ウサギ小屋では床を防水コンクリートにして、巣箱で飼うようにすれば、排泄物の始末は水を流したり、巣箱の下の新聞紙を替えたりするだけで済むので簡単である。このように、衛生的な状態を保つことが容易にできる環境作りが大切である。

また、排泄物は廃棄するだけでなく、これを生かした手段を考えることもよい。例えば、コンポストのような施設を作って、排泄物を利用して腐葉土作りをしたり、堆肥を作って近隣の人たちに配布したりすると、環境にやさしい取り組みになるとともに、地域と学校とのつながりが密接になることも期待できる。このように地域と学校がつながりをもつような活動の工夫をしたい。

### (3)飼育小屋の場所の見直しを

飼育小屋の場所の見直しも大切である。学校などの飼育小屋は、動物等の鳴き声や匂いが授業の妨げにならないようにとの配慮から、校舎から離れた敷地の外れに設置されていることも多い。このような場合では、学校周辺の住宅に飼育小屋が隣接してしまうことがあり、迷惑をかけることもある。

そこで、飼育小屋を建て直すことができるならば、近所に迷惑のかからない場所に移動する配慮がほしい。さらに、近所の迷惑ばかりでなく、子どもたちと飼育している動物たちがより触れ合うためには、子どもたちがかかわりやすい場所に飼育小屋を設置するようにしたい。具体的には、登下校や休み時間などちょっとした時間にも子どもたちが立ち寄り、動物とのコミュニケーションが図りやすい場所に設置したいものである。こうすれば、学校における動物飼育がより一層の教育的効果をあげることが期待できる。

### (4)それでも苦情がきたら

地域の住民に迷惑をかけないように配慮することは当然であるが、生き物を飼育している以上、避けられないこともある。学校としては、その苦情には誠意をもって対応することが大事である。

地域の住民には、学校で生き物を飼育する教育的な意義を理解してもらうように日頃から努力する他に、学校側の対策や具体的な努力の成果もきちんと説明することが大事である。さらに、地域の住民の立場に立ったときに、どのくらい迷惑になっているのかをきちんと調査して、学校側も苦情の程度を適切に把握する必要がある。

しかし、飼育している動物に必要な以上の“制限”を加えることは、「動物虐待」につながることも学校側としては十分に留意しておく必要がある。

これらの事柄を踏まえたうえで、学校教育の内容や現状を地域の住民に理解してもらうとともに、学校での動物飼育が地域ぐるみの取り組みへと広がるよう、おたがいのコミュニケーションを十分に図りつつ、これらの問題に対応する姿勢が重要である。

なお、学校の休日の動物飼育を地域の住民の協力で行っている地域もあり、学校と地域が一体化できる環境を目指したい。

## 6 飼育動物の死とその処置

現在の日本の社会では、子どもたちが命の誕生や死を見ることが少なくなってきた。核家族化、少子化、病院での出産や死、動物飼育が禁止されている集合住宅での生活などが、その原因と考えられる。したがって、子どもたちにとって学校での動物の死が初めての死別体験である可能性が高くなっている。

教室で飼っている小さなメダカが死んでも、家族が死んだように悲しむ子どももいる。動物の「死」に直面することは、「生きる」ことや「命」について考えることの裏返しであることを認識して取り組みたい。

### (1) 「死」に関する教育

小学校でも中学年以上になると、命には始まりと終わりがあることや、死別の意味を理解することもできるようになる。

低学年の子どもたちは、飼育動物の死に直面しても初めはなかなか理解できなかつたり、恐れて認めないことがある。病気やアクシデントによる死別には、原因に対する怒りや自責が重なり、悲しみも大きなものになる。

子どもたちの成長や死別の原因と理解の程度によって、死別の悲しみに多少違いが出てくる。いずれにせよ、子どもたちにとって死別は大きな悲しいできごとであることには間違いがない。そこで、まず命あるものは必ず終わりの死があることを説明することが必要である。また、死に対する理解の程度によって、悲しみの内容や程度に違いができるので、各々の理解を深める努力が大切である。

一方、なげきや悲しみをみんなで話し合い、打ち明けあったり、作文に書いたりすることも大切である。このようなことによって、子どもたちの間に悲しみをわかち合う機会ができ、死別の持つ悲しさや恐ろしさを軽減できることもある。死の否認、怒り、自責、そして受け入れが段階的に訪れるので、死別に関する教育は細心の注意を払って進めなければならない。

アンケートや作文によって子どもたちの気持ちを汲み取ることは大切である。その時の視点として次のようなことを読み取るようにしたい。

- ① 悲しみや精神的なダメージがいつまで残っているかを知る
- ② 悲しみを楽にしてくれたものは何かを知る
- ③ 自責や反省点を知る
- ④ 同じ動物をまた飼えるかを知る

### (2) 死体の処理について

校庭の片隅に小さな墓を作って埋めることは、日本の文化的背景から一般的に支持される

傾向がある。しかしながら、家畜伝染病予防法や人に対する衛生管理などの面から校庭に埋めることは避けなければならない場合がある。まずは、家畜保健衛生所や獣医師に相談するとよい。

## 7 飼育日誌

学校では、動物の飼育に多くの子どもたちがかかわり、当番制を取ることが多い。その場合、飼育動物の健康状態などが把握できにくいし、次の当番に申し送ることが必要な事項もあると思われるので、飼育日誌をつけることを勧めたい。前日の動物の健康状態や、今後気をつけておくことなどを記載し、連絡を密にすることが大切である。

飼育日誌は、生活科と児童会の飼育委員会などでも異なると思われるが、子どもたちが記録するものなので、記録のしやすさが重要である。その例を次に示しておくが、学校ごと、動物ごとに工夫することが必要である。

## 飼育活動日誌(例)

年 月 日 ( )		天気
時刻	始業前 ・ 業間 ・ 昼休み ・ 放課後	
記録者		
係の名前		
動物の名前		
世話の内容(活動の内容)		
エサ	与えた ・ 与えない	
水	与えた ・ 与えない	
そうじ	できた ・ できない	
健康チェック	できた ・ できない	
後かたづけ	できた ・ できない	
《気が付いたこと、次の人に伝えたいことなど》		
先生から		

### 飼育動物の健康チェック(例)

年 月 日 ( )	午前 ・ 午後	時	分頃観察
動物の種類と名前	種類：	名前：	
項目	観察結果	観察のポイント	
元気よさ	ある ・ ない	うずくまり・ふるえる	
食欲	ある ・ ない	エサの残った量	
体重	変わらない ・ 変わった	やせた・ふとった	
毛並み、羽毛	よい ・ わるい	つや・汚れ・毛玉	
傷や出血	ない ・ ある	ひふ全体・かさぶた	
体のしこり	ない ・ ある	しこりのあるところ	
目の異常	ない ・ ある	目やに・涙・はれている	
耳の中の異常	ない ・ ある	汚れ・におい	
鼻の異常	ない ・ ある	汚れ・鼻水・鼻血	
口もとの異常	ない ・ ある	汚れ・よだれ・歯ののびすぎ	
おしりのまわりの異常	ない ・ ある	ふんの汚れ・ただれ	
ふんの異常	ない ・ ある	ふんをしない・げり	
歩き方の異常	ない ・ ある	足をつかない・足を引きずる	
いつもとちがうようす			
観察者の名前			

## 第3節 動物飼育のためのネットワークづくり

### 1 ネットワークづくりの必要性と連携のあり方

学校飼育動物の適正な飼育や管理を行うには、学校、自治体、獣医師会、地域ボランティア等が一体となって、それぞれの役割を分担し、有機的な連携のできるネットワークを作ることが望まれる。特に、学校飼育動物の衛生管理や疾病などに関する対応については、教育委員会だけでなく、地域の獣医師会の理解や協力を得て組織的に対応できるようにすることが大切である。このような体制づくりを進めることによって、飼育動物の健康を維持するとともに、生命に関する教育や心の教育をより積極的に進めることや、教職員の負担を軽減することが期待できる。

ネットワークづくりを進めるに当たっては、学校、自治体、獣医師会、地域ボランティア等がそれぞれの役割を分担し、そのうえに立って適切な連携を図るようにすることが大切である。具体的には次のようなことが考えられる。

#### ①学 校

学校は、動物を飼育する目的や意義、動物飼育に対する考え方を明らかにし、保護者や地域の住民に説明できるようにする。その際、学校の規模、条件、教職員、施設、予算等についての実態を踏まえ、何のために（目的、意義）、どのような動物（種類）を、どの位（数）、どのように（飼育方法、経費、教育課程上の位置付け等）飼育するかについてを明確にする。また、飼育にあたって、どのような課題があるのかも明らかにして示すことが大切である。

必要に応じてPTAを含めたボランティアを募るなどとともに、地域の獣医師の協力を得るようにする。

学校飼育動物の意義、日曜日や祝日、長期休業日、災害時の対応、関係者の連携のあり方などの課題について、教職員、獣医師、PTA、地域ボランティア等を含めて検討会や学習会を開くようにすることが望まれる。

#### ②自治体

学校飼育動物についての実態を把握するとともに、学校飼育動物に関する学校や地域の実情に即した方策を明らかにするとともに、学校と獣医師との緊密な連携体制を構築することや必要な予算措置をすることが望まれる。

また、学校と獣医師、地域ボランティア等の連携を密にするためのネットワークづくりを支援することが望まれる。

#### ③獣医師会

地域の獣医師会や獣医師は連絡網などを作成し、これを学校や教育委員会に提示して、常時緊密な連携、対応が図れるようにすることが望まれる。



また、飼育動物に疾病の疑いやケガが生じたりした場合、速やかにこれに対応するとともに、定期的な巡回指導などが行われるようにするなど、予防医学に力を入れることも大切である。

#### ④地域ボランティア

地域ボランティアに対しては、連携を緊密にし、土曜日・日曜日や祝日、長期休業日、災害時などについて、必要な協力を求めることが考えらる。

## 2 N市の取り組みの例

N市では、飼育指導、動物の診療等について、次のような取り組みを進めている。このような先進的な地域の取り組みを参考にして、各地域や各学校の実態に応じた取り組みを勧めたい。

### ①飼育指導

初年度には、生活科や飼育担当の教師及び養護教諭に対して講習会を行った。次年度より、毎年学校の要望により、獣医師が2人1組で、年1、2回の学校訪問指導を実施している。指導に当たっては、校長、教頭、生活科や飼育担当教師等と、動物との交流の仕方、飼育方法、公衆衛生などについて懇談する。また、飼育舎や飼育場所などを点検し、改善点などについて話し合う。必要な場合には、教師と獣医師が協力して児童に直接指導や助言などをするようにしている。

### ②動物の診療

学校の飼育責任者が動物病院を予約して、動物を病院へ連れていく。診療した獣医師は、診療記録と指導内容を記録し、学校に報告している。また、診療以外でも必要なときには、いつでも相談できるような体制を整えている。

### ③事業報告

市の獣医師会は訪問指導後の指導内容、改善点、診療や相談実績等を年度末に市の教育委員会に報告している。

### ④予算措置

前年度の実績に基づいて予算を措置している。

## 第4節 動物飼育と関係法令

### 1 動物飼育に関する関係法令

動物の飼育に関する関係法令として、「動物の愛護及び管理に関する法律」等がある。

これらは、ウマ、ブタ、メンヨウ、ヤギ、イヌ、ネコ、イエウサギ、ニワトリ、イエバト、アヒルが中心だが、人が占有している鳥獣すべてに対して、みだりに殺し、傷つけ、苦しめることがないようにし、適正に取り扱うよう定めている。また、「狂犬病予防法」、「家畜伝染病予防法」も、イヌや家畜の飼育に係る法令である。

また、鳥獣保護に関する法令として、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」があり、これには狩猟制度、鳥獣保護区の設置、鳥獣の流通の規制、鳥獣保護委員制度、違反した際の罰則規定などが定められている。なお、「文化財保護法」では、学術上価値の高い天然記念物としての鳥獣について規制が定められている。

さらに、輸入動物がペット動物として販売されている昨今、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（ワシントン条約）」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」にも留意したい。

学校における環境衛生管理の観点からは、「学校環境衛生の基準」（文部科学省告示）において、飼育動物の施設・設備を清潔に保つことが定められている。

#### 動物の愛護及び管理に関する法律

動物愛護の基本は生命を尊重することにある。動物愛護精神の涵養は、動物を愛護し、その虐待を防止し、これを適正に飼養及び保管するためだけでなく、人の生命を尊重し、友愛と平和の情操を高揚するうえでも大切である。

今日、社会の変化とともに人と動物を取り巻く環境も大きく変化し、特に、核家族化、高齢化社会が進むなかで、動物の存在意義も大きく変わってきた。最近では、家族の一員として「伴侶動物」であるとの認識が広まりつつあるように、動物が人々の生活のなかで重要な地位を占めるようになってきている。今後、このような傾向は一層強まるものと思われる。

他方、飼育者等における動物の飼養に対する知識、モラルの欠如等により、無責任な飼い主による動物の遺棄や迷惑行為、一部の心ない者による動物の殺傷や虐待行為も後を絶たない現状がある。また、幼児児童の情操教育における動物との触れ合いの重要性や必要性が改めて認識されている。このような背景のもとに、「動物の保護及び管理に関する法律」が平成11年12月に改正され、「動物の愛護及び管理に関する法律」として平成12年12月から施行された。ま

た、同法は平成17年6月に改正、平成18年6月から施行され、学校における動物の飼育について、同法第3条において、動物の愛護と適正な飼養に関する普及啓発を推進するため、教育活動等が行われる場所の例示として、「学校、地域、家庭等」が明記された。

さらに、同法改正を受けて、「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」（平成14年環境省告示第37号）が改正、施行された（学校における動物の飼育については、実験動物などの一部の例外を除き、本基準の適用対象）。改正前の基準においては、動物の健康と安全の保持、動物による人の生命、財産の侵害ならびに迷惑を防止するための飼い主の責務を明らかにするとともに、学校、福祉施設等においては特に「獣医師等十分な知識と飼養経験を有する者の指導の下に行われるよう努める」等の規定が設けられていたが、この改正により、「休日等においても、動物の飼養及び保管が適切に行われるよう配慮すること」等の規定が新たに設けられた。各学校においては、同基準の趣旨を踏まえ適切な飼養及び保管を行うことが求められている。

### 【家庭動物等の飼養及び保管に関する基準のポイント】

- ①人と動物の共生社会の実現のため、飼養者の基本的責務を重視していること
  - 飼養開始前の知識の修得と、終生飼養を前提とする将来にわたる飼養可能性の判断
  - 所有者を明示する措置の推進
  - 繁殖制限措置の徹底
  - 学校、福祉施設等における適切な飼養の確保
    - ・管理者は、学校、福祉施設等の利用者が動物の適切な飼養及び保管について正しい理解を得ることができるよう努めること。
    - ・管理者は、動物の飼養及び保管の目的、学校、福祉施設等の立地及び施設の整備の状況並びに飼養又は保管に携わる者の飼養能力等の条件を考慮して、飼養及び保管する動物の種類を選定すること。
    - ・異種又は複数の動物を同一施設内で飼養及び保管する場合には、その組合せを考慮した収容を行うこと。
    - ・管理者は、動物の飼養及び保管が、獣医師等十分な知識と飼養経験を有する者の指導の下に行われるよう努め、本基準の各項に基づく適切な動物の飼養及び保管並びに動物による事故の防止に努めること。
    - ・管理者は、学校、福祉施設等の休日等においても、動物の飼養及び保管が適切に行われるよう配慮すること。
    - ・管理者は、飼養及び保管する動物に対して飼養に当たる者以外の者からみだりに食物等を与えられ、又は動物が傷つけられ、若しくは苦しめられることがないよう、その予防のための措置を講じるよう努めること。
- ②生物多様性保全等新たな社会的要請への対応
  - 動物の逸走、放し飼い等による野生動物の圧迫等の防止を飼養者の責務として明記

## 2 学校で飼育できる動物

原則的には野生鳥獣は、誰であろうと飼育できない。ただし、許可を得ればよいものや傷病鳥獣などは例外である。

また、野生の鳥類の卵は、すべて採取禁止である。野生の鳥類の卵を学術研究、有害鳥獣駆

除のため、その他特別の理由で採取する必要がある場合は、環境大臣または都道府県知事に採取の申請をすることになっている。ただし、次の鳥類の卵を駆除の目的で採取するときの捕獲許可は、都道府県知事が行うことになっている。

①カルガモ、②キジバト、③ドバト、④スズメ、⑤ハシボソガラス、⑥ハシブトガラス。

したがって、子どもたちには、むやみに鳥の巣から卵を取り出すことのないように指導する必要がある。

また、違反して捕獲した鳥獣は、すべて流通が禁止となっているので、保護者から野生鳥獣を飼育してほしいなどの申し出があった際には、学校では十分注意して対応することが大切である。なお、ヒバリ、ヤマガラ、ウグイスなどの飼育は、現在、環境大臣の許可権限となっている。しかし、輸入されたものはその対象ではないが、なかには国内で採取したものを輸入と偽っている場合があるので、十分注意が必要である。

さらに、国立公園内で採取されたもの、天然記念物の指定を受けているものなどが学校に持ち込まれる可能性があるので、特に注意して対応したい。

したがって、学校で飼育できる動物とは、原則的には家禽や家畜といった長い間に人間生活に都合よく改良された鳥や獣である。しかし、これらのなかには野生化して人間に依存せずに生きているものもある。

なお、傷病鳥獣を学校で救護したときは、ただちに都道府県の鳥獣行政を担当する課またはその出先機関に連絡をとり係員の指導に従う。救護したまま連絡をしないと密猟と誤解されることもあるので注意する。行政に届け出、鳥獣飼養許可証を発行してもらい、傷や病気が回復したら放野する。

最近、ペット動物として日本国内に持ち込まれる鳥獣が多いが、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（ワシントン条約）」や「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」を無視した輸入についても、十分に気を付けなければならない。

さらに、野生鳥獣はさまざまな伝染病の病原体を保持している場合がある。特に輸入された鳥獣は、未知の病原体を保持している可能性があり、中には治療方法が確立されていないものもあるので十分に注意が必要である。特にサル仲間、人間に対する危険性のある病原体を持つ可能性が高いので、やめたほうがよい。

また、逃げ出して野生化し、在来の動植物に影響を与える可能性が高いものは避けるべきである。タイワンリスやアライグマ、インコ類はその代表例である。いずれにしても、学校では、野生動物や輸入動物を引きとったり、飼育しないことを原則とする。

### 3 学校で気を付けたい飼育動物の扱い

**【動物をいじめてはいけない。ましてや増えすぎた動物を勝手に捨てたりしてはいけない。】**

「動物の愛護及び管理に関する法律」によれば、どんな動物も虐待したり、人に飼育されている動物（哺乳類・鳥類）を勝手に遺棄してはいけない。また、イヌやネコが繁殖して困るときは、避妊手術を行うよう定めている。そして、どうしても動物を殺さなければならない場合は、できる限りその動物に苦痛を与えない方法で行わなければならないとされている。また、イヌやネコがどうしても飼うことができなくなった時は、都道府県知事等が指定した団体等に引き取ってもらうことができることになっている。

#### 【イヌを飼うには登録と狂犬病予防注射を】

「狂犬病予防法」により、イヌを飼い始めたら、市町村長に登録を申請し、狂犬病予防注射を受ける。保健所で鑑札と注射済み票をもらい、イヌの首輪に付ける。なお、登録及び予防注射は、生後90日（3カ月）が過ぎたら直ちに実施する。詳しくは保健所か獣医師に問い合わせるとよい。なお、登録は生涯1回だけだが、狂犬病予防注射は毎年1回受ける必要がある。また、イヌが死亡したときは保健所に届けなければならない。

#### 【イヌはつないで飼う】

東京都をはじめ、多くの都道府県ではイヌをつないで飼うことが義務づけられている。

#### 【ニワトリやウサギが死亡したときは、獣医師に連絡する】

「家畜伝染病予防法」の改正により、従来の家畜に加えウサギの疾病や死亡についても、近くの獣医師に連絡することが必要となった。これは、家畜伝染病のまん延防止のためであり、学校で飼育している家畜（ニワトリ、ウズラ、アヒルも含む）に適用される。したがって、事故で死亡した場合などを除き、理由がはっきりしない場合には勝手に校庭などに埋葬してはならない。詳しくは獣医師に相談するとよい。

#### 【飼育動物の施設・設備の清潔状況について、毎学年3回の定期検査を行う】

平成16年2月の「学校環境衛生の基準」の改正により、校地・校舎の清潔状況の検査項目に「飼育動物の施設・設備の汚れや破損の有無」が加えられ、毎学年3回定期に行う検査の際に、飼育動物の施設・設備の汚れや破損の有無を調べることとされた。施設・設備は常に清掃し、清潔にしておくとともに、破損がある場合には速やかに補修するなどの措置を講じる必要がある。

#### ○動物飼育に関する関係法令

「動物の愛護及び管理に関する法律」、「動物の愛護及び管理に関する法律施行令」、「動物の愛護及び管理に関する法律施行規則」、「家庭動物等の飼養及び管理に関する基準」、「狂犬病予防法」、「家畜伝染病予防法」、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」、「文化財保護法」、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（ワシントン条約）」、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」、「学校環境衛生の基準」

## 第4章 動物飼育の活動例

### 第1節 幼児における動物飼育の活動例

#### ゆみさんとウサギのぴょん太の話

##### 1 この話のプロローグ

4歳になったゆみさんは幼稚園に入園した。初めに関心を持ったのがウサギのぴょん太だ。ゆみさんにとってぴょん太は、幼稚園になじめず、友達も見つからない淋しさを満たしてくれる存在であった。さらに、友達のように感じる存在にもなった。ここでは、ゆみさんがぴょん太との生活をとおして、驚いたり、新たな発見をしたりしながら、自分との違いや友だちの存在などに気づいていく過程と、ぴょん太への親しみがどのようにゆみさんに育っていったのか、また、学級の子どもたちにも温かい思いやりの心が育っていった様子を見ていきたい。

教師は、ゆみさんとともに悩んだり、喜んだりしながらゆみさんの生活を支えてきた。特に、家庭に働きかけ、理解を得ることに努めた。ゆみさんは、幼稚園という初めて味わう集団生活のなかで、ぴょん太をよりどころにしながら、自分の殻を破ったり、自分らしさを模索する貴重な体験をした。卒園する時期には仲のよい友達もでき、ぴょん太を一人占めにするのではなく、学級の友達と相談しながら世話をする姿が見られるようになった。また、卒園した後もぴょん太の世話を気にかけて、小学校1年生の夏休みには、母親や弟と一緒に野菜を持って嬉しそうに訪ねて来た。

飼育動物にとって、人間は生きるために大切な存在であり、人間にとっても、動物は優しい心情を喚起するなど大切な存在である。幼児は、大人の行動を実によく見ている。自分もそのようになりたい、そうしてみたいと思い、やってみる時期である。ゆみさんも、教員のぴょん太へのかかわり方を真似しながら生き物へのかかわり方を学んだ。

##### 2 ゆみさんの成長の軌跡

###### (1)ぴょん太との出会い

###### 4歳児1学期のころには

ゆみさんはなかなか友達ができないので、担任の教師と毎日一緒にいることが多い。教師がぴょん太の世話をするときも一緒。幼稚園を休むことなくがんばる。

教師は、優しい表情で語りかけながらぴょん太の世話をした。

「あらあら、ウンチがいっぱい。待っててね、きれいにしてあげますよ。」

「はーい、ごはんですよ。おいしいですよ、たくさん食べてね。」

このような教師のかかわり方をみて、ゆみさんは教師と同じようにぴょん太に話しかけている。そして、教師の姿を真似しながら次第にぴょん太へ近づいていった。

教師は、ゆみさんがぴょん太を怖がる様子がないので、積極的にぴょん太の世話を一緒に行うことにした。このような幼稚園での生活ぶりを母親に喜んでもらいたいと思った教師は、意外にも大きな壁にあたってしまった。

教師から話を聞き、母親は、なお一層心配そうに、「うちの子には、友達がたくさんできるようになって欲しいと思って幼稚園に入れたのに、ウサギと遊ぶなんて情けない。友達と遊ばせてください。」というのである。

## (2)ぴょん太と遊ぶゆみさん

### 4歳児の2～3学期ごろには

ゆみさんにとって、自分の思いどおりになるぴょん太とのかかわりをたっぷりと味わいたいという思いが強くなっていった。人間と同じような遊びを考え、ぴょん太をままごとのお客さんにしたり、箱車に乗せて乗り物ごっこをしたりした。そのため、しばしば他の子どもとけんかが起こった。

「ゆみさんだけぴょん太と遊んでだめだよ。私にも触らせて。」

「私も、ぴょん太と遊びたいのよ。」

しかし、ゆみさんは、なかなか譲れない。毎日のようにけんかをして大泣きをする。教師がなだめてもだめ。ぴょん太を独占気味であった。

教師は、ぴょん太をめぐるトラブルが発生したときには、双方のいい分をよく聞くようにした。しかし、ぴょん太をめぐるトラブルは続いた。紙芝居を作り、学級の子どもたちにぴょん太への理解を図ったが、あまり状況は変わらない。そこで考え方を改めて、ゆみさんのぴょん太に対する優しい姿や、世話の仕方の丁寧な面を他の幼児に知らせることにした。そして、ゆみさんが得意になったり、頼りにされたりしているということが感じられるように学級経営の方針を立て直すことにした。

## (3)ゆみさんとぴょん太との支えあう姿

### 5歳児になり1学期には

ゆみさんに大きな変化が起こる。今までぴょん太をめぐるけんかをしていた子どもと、あまりトラブルを起こさなくなった。友達と相談することもできるようになってきて、友達に受け入れられるようになった。しかし、相変わらず、ゆみさんのぴょん太との遊びは盛んに行われている。

進級の記念撮影では、ゆみさんの提案で学級の子どもたちとぴょん太と一緒に撮影することになった。皆で相談した結果、担任の教師が膝の上に抱くことになった。飼っている生き物は、

学級の一員だという気持ちが芽生えていた。また、7月の避難訓練の時には、ゆみさんが「ぴよん太も連れて逃げようよ。」と叫んだ。ぴよん太の身になって考えようという成長が見られた。

教師は、ゆみさんの変化を母親に喜びを持って伝えた。

母親は初めて笑顔になり、安心したようであった。ウサギとだけ遊ぶのではなく、友達と交流できることが母親を安心させたようだ。ウサギへの優しい心情や、世話をするという積極性、自律的な態度が身についてきていることなどを詳しく伝えた。また、我が子の成長を信じて、さらにゆみさんらしさを伸ばしていくことについても話した。母親は、子どもには、親の尺度を性急に求めるのではなく、子どもの主体性を大事にする事の尊さを学んでくれたようだ。

#### (4)ぴよん太がゆみさんのTシャツをかじる

ゆみさんの母親がかじられたTシャツを持って、ゆみさんと一緒に、幼稚園にかけこんできた。

母親 「ゆみが幼稚園でいじめにあったのではないのでしょうか。よく調べてください。」

教師 「ゆみさんは？友達にいじめられたの？ぴよん太にかじられたの？」

ゆみ 「……。わすれた。わからない。」

と、最後まで黙っている。

そこで、幼稚園の教師が協力してTシャツの切れ端を探すことになった。予想どおり、ぴよん太の飼育小屋の中にあった。しかし、ゆみさんは最後まで「ぴよん太にかじられた」とはいわない。「友達にいじめられた」ともいわない。ただ、母親はたいそう安心して、「ぴよん太だったんだわ、きっと。」と帰った。

翌日、母親はぴよん太のために野菜を持って来てくれた。筆者には、ゆみさんがぴよん太をかばったように思えてならない。

#### (5)友達と、ゆみさんの成長

3学期に入り友達との遊びも活発さを増してきた。さまざまな遊びや修了記念製作など、自分たちの課題に取り組みながらも、誰かしらぴよん太の世話を楽しんで行う姿が毎日見られるようになった。ゆみさんがふんを取っているところへ、2～3人の友達が近寄って来て、ゆみさんにふんの取り方を教えてもらったり、ぴよん太に親しみを込めて話しかけたりする。

「私達が小学校に入ったら、何組さんがぴよん太のお世話してくれるのかしら。」

「そうね、何組さんかしら。可愛がってくれるといいわね。」

「私のお母さんね、初めはぴよん太のこと嫌いだったんだって。でもね、今は好きなんだよ。だってね、これ持っていきなさいって毎日お野菜くれるの。」

こう友達に話すゆみさんの顔はとても生き生きとして、嬉しそうであった。



学級のなかで認められた喜び、友達ができた喜び、ぴょん太と一層仲良くなった喜び、母親に認められた喜びなどに満ち溢れていた。

小学生になったゆみさんは、夏休みになると、手にはしっかりと野菜を持って、幼稚園に立ち寄り、「ぴょん太元気？」といいながら、なつかしそうに会いにくる。

### 3 動物の飼育と幼児の成長をかみしめたい

ゆみさんのように動物に興味・関心を示す子もいるが、そうでない子どももいる。多くの子どもたちが動物に親しめるようにしたい。そのためには、教師が温かい愛情をもって、じっくりとその子のよさをとらえ、その子に応じたかわり方をしていくことが欠かせない。

「ウサギと遊ぶよりは、友達と遊んで欲しい」というゆみさんの母親の気持ちを理解しながら、長い目で親に働きかけていくことが大切である。不安な状態では理解を得ることが難しいだろう。母親を安心できるように努めることや、教師の尺度をいきなり提示しない配慮が必要である。特に、最近動物にも触ったことのない親が増えてきたので、親と一緒にしかかわることが多い幼稚園での動物飼育の意義はとても大きい。

ゆみさんは、母親が心配したように、友達よりもぴょん太の方に関心が強かったように思われた。しかし、実際には、友達を求めたり求められたりしながら楽しく過ごすようになったのである。

ゆみさんは、ぴょん太に会えたことで、心の奥底にしまいこんでいた「優しさ」や「積極性」を自分で呼び戻したのではないだろうか。

幼稚園では、上手にしかも楽しそうに飼育当番をしていた子どもが、小学生になって「もう幼稚園を卒業したんだから動物の世話をしないでもいいから嬉しい。」といったという話を聞いたことがある。幼児にとって望ましい動物の飼育のあり方について真剣に考えてみなければならぬことを実感している。ここで取り上げた子どもたちにとって、動物飼育はいつまでも思い出したい豊かな体験になったと思われる。

## 第2節 小学校低学年における動物飼育の活動例

### 愛護する心情や態度が育つ動物飼育

#### —第1学年「なかよくしようね どうぶつさん」より—

低学年の子どもにとって、ウサギ、ニワトリ、アヒル、モルモット、ハムスター等の生き物はしぐさが愛らしく親しみやすい。しかも、抱き上げたときの温かさ、鼓動、重量、反応等々、実感として「生きている」ことを感じることができる。また、生き物との触れ合いをとおして、抱かれると嬉しいはずなのに嫌がって逃げようとするなど、自分とは随分違うということを実感し、ウサギなどの生き物の立場になって考えたり優しく接したりできるようになっていく。

ここでは、1年生の子どもたちがどのように生き物に触れ合い、どのような心情が育っていくのか、子どもの姿を見ていきたい。

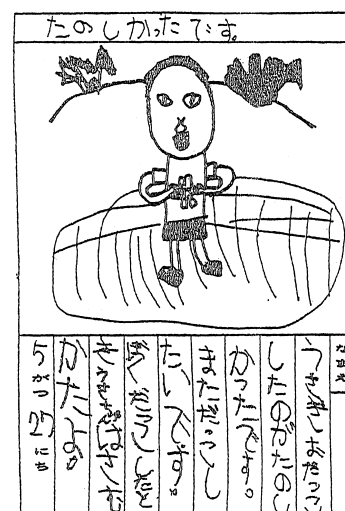
### 1 十分な触れ合いが優しい心を育む

多くの子どもたちはウサギやハムスターなどの生き物が大好きである。Hさんもウサギが大好きで、ウサギを見ると「かわいいな。」といって駆け寄ってくる。そして、近くにある草花を与えようとする。それから、抱こうとする。しかし、ウサギが逃げたり暴れたりするので、なかなか抱くことができない。それでも頑張って強引に抱く。ウサギが嫌がっていても抱けたことに満足し、嬉しそうな表情で抱き続ける。ウサギは腕のなかで苦しうにもがいている。

下の写真は、苦しくて逃げだそうとしているウサギを嬉しそうに抱いているHさんである。Hさんは、優しく抱いてあげようと思っはいるものの、まるでぬいぐるみのウサギのように扱っている。下のカードはこの活動のあとHさんが書いたものである。Hさんはウサギが震えていたのを自分のことと重ね合わせて考え、寒くて震えていると思ったのであろう。



〈嫌がるウサギを無理矢理抱いているHさん〉



友達から寒くて震えているのではなくて、抱き方が悪いから怖がっているんだということを聞いたり、友達の膝に座って安心した様子でニンジンを食べているウサギを目の当たりにしたりして、初めてウサギが怖くて震えていたことに気付いたのである。

上手に抱ける友達から教わって抱き方を練習し、ウサギが膝の上でエサを食べたり寝そべったりするようになって、改めてウサギにも喜ぶ抱き方と嫌がる抱き方があるんだということを実感したようである。

また、何度も抱いているうちに、ウサギはエサを与えればいつでも食べると思っていたのに、お腹が一杯の時は大好きなニンジンを与えても見向きもしないことに気付いたり、いつも小屋の隅っこに行くことに気付いたり、ウサギの嫌がるしぐさにも気付いたりするようになった。

次の時間、まだ抱けない友だちにHさんの「耳を立てているときは怖がっているんだから、ギュッと強く抱いちゃダメ。赤ちゃんを抱くようにソーと優しく抱いて。」という声が聞こえてきた。何度も何度もウサギと触れ合うなかで、ウサギのことがわかり、ウサギへの理解がウサギに対する優しい思いとなって、このような言葉に表現されたのであろう。

Hさんは、これらのことをとおしてウサギにはウサギの意志があり、自分とは違うということに気付いていったといえる。



〈上手に抱けるようになったHさん〉

## 2 生き物に対する共感的理解が優しさを育む

「アヒルのガアちゃんの歩き方、よたよたしていて可愛いな。」といいながら、おしりを左右に振り、アヒルのまねをしながらアヒルの後からついて歩くMさん。水浴びが大好きだと友だちに聞いたので、さっそくベビーバスに水を入れ始めた。

気持ちよさそうに水浴びをしているガアちゃんにレタスやキャベツを与えると、おいしそうに食べ始めた。エサを与えるとき、ガアちゃんの口ばしで挟まれたが痛くなかったので、アヒルに歯がないことを初めて知った。Mさんは歯がないとかめないといい出し、ガアちゃんが食べやすいようにレタスなどを小さく切って与えていた。Mさんのガアちゃんに対する優しい思いが伝わってくるようであった。

その時、「びびっ」と音がして水の中にふんをした。エサのレタスやキャベツなどと一緒にふんが浮いていたのを見て、「自分だったら気持ちが悪い。ガアちゃんも気持ちが悪いと思うから水をかえてあげようよ。」と側にいたKさんに声をかけ、二人で水を替え始めた。

生き物と触れ合う体験をとおして、歯がないとかめないことや、ふんと一緒だと気持ちが悪

くてエサを食べないことを、自分と重ね合わせることによって共感的に理解したのであろう。

ふんをするガアちゃんに、「ガアちゃんダメじゃないの。」といいながらも、何度も何度も水を替えているMさんの姿は、まるでガアちゃんのお父さんみたいに感じられた。

Mさんはいうまでもなく、飼育委員会のお兄さんやお姉さんに混じってガアちゃんの小屋の掃除やエサやり、散歩を休み時間に毎日するようになり、発見したことを朝の会でみんなに紹介したりした。



〈アヒルのまねをしておしりを振って歩くMさん〉

### 3 根気強く飼い続けることが生きていることを実感する

飼育を続けていくと、小屋の掃除が大変になってくる。新しくなったケージもだんだん汚くなり、2～3日掃除を忘れると一層掃除が大変になってくる。

毎日エサを与えてもすぐ食べてしまうし、一日経つと排泄物で新聞紙が汚れるので、生き物の世話の大変さを実感するようになる。

「生きているんだから、仕方がないよ。僕たちだってご飯を食べたりウンチをするんだから…」という子どもの言葉の中に、ハムスターも自分たちと同じように生きているんだということを、世話をし始めて初めて実感したことが読み取れる。

世話をし続けるうえでの楽しみは、なんととっても赤ちゃんの誕生である。お母さんが苦しみながら、袋に入ったハムスターの赤ちゃんを次から次に生む様子を見た子どもは、思わず「ハムちゃん頑張れ。」と両手を握って応援する。そして、赤ちゃんが入った袋を破り、赤ちゃんをきれいになめてあげる母親の様子を見て、「ハムちゃんって優しいお母さんだね。」と感心する。

誕生のドラマに感動した子どもたちは、赤裸でグロテスクな赤ちゃんでも、自分たちの可愛いハムちゃんが生んだとなると、「可愛い。可愛い。」という言葉となる。この言葉には、子どもたちのハムちゃんと赤ちゃんに対する最大級の愛情が詰まっているのである。

赤ちゃんの弟が一人いるAさんは、人間は一度に一人しか生まないのに4匹の子どもを一度に生むハムスターに驚き、感動した。

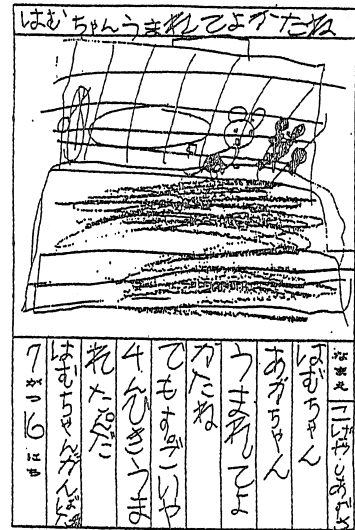
また、Aさんは、弟の赤ちゃんのKさんがまだ一人ではミルクが飲めないのに、生まれてすぐ自分で母親の乳を必死に探して飲むハムスターの赤ちゃんに驚き、生きるたくましさを感じたようである。

小さな小さなハムスターの、新しい命の誕生の喜び、必死に乳を飲み生きようとするたくましさから、小さくても生きているんだということを実感するよい機会となったようである。

赤ちゃんが生まれたのを機会に、改めてみんながハムスターにかかわれるように掃除、エサやり、遊びの当番を決めた。

「本当によく食べるなあ。」「コロコロウンチは元気な証拠。」「同じ場所にウンチをするなんておりこうなんだ。」等々、成長を喜びとして続けていった。

赤ちゃんの成長を喜びとしての世話が、「今日は私がしなければ」という思いとなり、責任感の芽生えにもつながった。



#### 4 生き物の死は、自分を見つめなおすよい機会である

11月。お腹の大きくなったハムスターがなかなか出産しない。日に日にお腹は大きくなるがいっこうに産まれない。子どもたちは今か今かと待ち望んでいる。妊娠期間の15～16日を経過しているのに出産の気配がない。

「秋だから遅いのかな。」「赤ちゃんの数が多いので、まだ育っていないのかな。」等々いいながら出産を待った。

予定日を3日過ぎ、4日過ぎるとさすがに子どもたちも心配になりだした。動物病院の近くに住んでいるMさんは、「帰りに、様子を話してどうすればよいか聞いてくる。」と行って帰った。ハムスターのお母さんと呼ばれるほどハムスターの世話をよくするWさんは、新鮮な野菜が必要だといって毎日キュウリやサツマイモ等を持ってきて与えていた。布を掛けて静かにしてあげようと世話をするKさん。それぞれに心配する子どもたち。

子どもたちがハムスターの出産を心から楽しみにしていることが、それぞれの子どものハムスターへの優しい行為や言葉をかけることから伝わってくる。このことは、自分たちが飼っている可愛いハムちゃんが出産するからこそ湧き出てくる思いなのであろう。

次の日の朝、Mさんが「ハムスターの出産は安産だから心配しなくてもいいそうです。でも、心配だったら明日連れてきてごらん。」という獣医師からの話をした。話を聞いてみんなは安心したが、大きなお腹をして苦しそうな様子を見ていると、誰からともなく「一度獣医さんの所に連れてって診てもらおうよ。」という声が上がったので、その日



Mさんに連れていってもらったことになった。翌朝、Mさんが大きなお腹のまま死んだハムスターを半泣きになって連れてきた。獣医師が「もう少し早かったら助かったかもしれない。」といて残念がっていた話を、泣きながらみんなにした。

「赤ちゃんも一緒に死ぬなんてかわいそう。」「ハムちゃん、苦しかったでしょうね。」と、突然の死に対して悲しみ、すすり泣く子で教室がパニックになるほどであった。硬直し、冷たくなったハムちゃんをさすりながら、「死んじゃうと冷たくなるんだね。うちのおじいちゃんが死んだとき、冷たくなったのと同じだ。」と、死を実感しているTさん。

大半の子どもたちは、死ぬと冷たくなることに驚き、こわばった表情で、「怖い」とか「かわいそう」等々興奮気味にいつている。

ウサギやハムスターなどの小動物を飼ったことのない子どもが多いせい、生き物の死に直面したことのない子どもがほとんどだったので、ハムスターの死に対してかなりショックを受けたようである。特に、生きていたときに抱いたときの温かさと死んだときの冷たさの違いに、死を強く意識したようである。

興奮が収まると、今までの自分たちのハムスターへのかかわり方が気になりはじめた。「エサや水はきちんとやっていたのに、どうしてなのかな。」「私たちがたまにお掃除を忘れていたのがいけなかったのかな。」「お腹に赤ちゃんがいたのに気付かないで、抱いたりしたからかな。」等々、ハムちゃんに対しての今までの自分のかかわり方や世話の仕方を反省している子どもの様子は真剣そのものであった。

子どもたちの表情からは、自分たちに死の原因があったのではないかと、今までのかかわり方を振り返っている様子が伝わってきた。感動的な赤ちゃん誕生の経験のある子どもたちなので、ハムちゃんとお腹にいた数匹の赤ちゃんを死なせてしまって、本当に申し訳ないと思ったのであろう。

ハムスターの死という悲しい出来事ではあったが、生命の尊さについて考えるよい機会であった。

#### <4年生のY.Kさんの作文から>

私は、1年生のとき、クラスで飼っていたハムちゃんがとてもかわいかったので、お母さんにおねだりしました。でも、お母さんは「ハムスターなんて家では飼えないよ。」と、いってなかなか買ってくれませんでした。

そこで、スイミングの帰りにペットショップにお母さんを連れていきました。すると、ハムスターが両手でヒマワリの種を食べている様子を見て「ハムスターて、かわいいね。」と聞いたのを聞いて、『しめた』と思いました。

それから2～3日して、あの時見ていたこげ茶色の模様のハムスターを買ってきてくれました。名前をハーちゃんをつけました。今、飼っているハムスターは全部で14匹です。みんなハーちゃんの子どもと孫たちです。

— 中 略 —

1年生のとき、クラスで飼っていたハムちゃんが、もうすぐ赤ちゃんを産むというときに死んだことは今でも覚えています。ハーちゃんがピーちゃんを生むとき、元気に生まれるように神様にお願いしました。そうしたらハーちゃんは12匹の赤ちゃんを産みました。

いところに2匹、おばあちゃんに2匹、友達に5匹あげました。残りの3匹はカー君、キー君、ピーちゃんと名づけました。1年後、ピーちゃんが友達の飼っているミー君とお見合いをしたので6匹増えました。ですから、今は9匹います。

ハムスターは寿命が短いので、大事に飼っているハムスターが死ぬことがあります。ハーちゃんもピーちゃん達を産んで2年後に死んでしまいました。とても悲しかったです。それに、毎日、ハムスターのケージのお掃除をしたり、エサをあげたり、遊んであげたりするのは大変です。

でも、ハムスターを飼って思うことは、ハムスターの世話をしたり遊んだりしていると、とても気持ちが落ち着いて、とてもやさしい気持ちになれるのです。だから私は、ハムスターを飼うのがとても好きです。

みんなもハムスターを飼ってみてください。きっとやさしい気持ちになれると思いますよ。

### 第3節 小学校中・高学年における動物飼育の活動例

#### 思いやりのある子どもを育てる飼育活動

##### －飼育委員会の活動をととして－

#### 1 “やさしさ”の芽生え

子どもたちは、動物が大好きである。授業や飼育活動で、動物と触れ合っている時の笑顔、動物のためのさまざまな活動を精一杯行っている時の表情は、とてもやさしい顔になる。H子さんは、友達とお話をするのが少しだけ苦手である。ウサギを抱くのは、ちょっと怖いけど、大好きなので怖いのをがまんして、そっと捕まえて、やさしくだいじそうに自分の胸のところを抱く。そんな時、H子さんは、とても明るい笑顔になる。

#### H子さんの作文より

ウサギは、私と遊んでつかれたようです。私はもっともっとウサギさんと遊びたかったけど、S子さんが「うさぎさん、つかれたみたいだよ。」といったので、そっと寝かせてあげました。家から持って来た布をかけてあげました。目を閉じて気持ちよさそうに寝ていました。

次の日、プールへ入りたいほど暑い日でした。ウサギが心配なので見に行きました。ウサギさんたちはすごく暑そうで元気がありませんでした。S子さんと相談して、ダンボールで日陰を作ることにしました。飼育小屋にダンボールをガムテープではってあげました。大変だったけど、日陰ができたならウサギさんがみんな日陰に集まりました。ウサギさんたちが、うれしそうに手や足を伸ばして寝そべっているのを見て、よかったですと思いました。先生にも「やさしいね。ウサギさんも喜んでいるよ。」と、ほめられてすごくうれしかったです。

初めは、「ウサギのウンチって豆粒だ。」「ウサギって温かいよ。」「ウサギの後ろ足は大きいよ。」といったウサギの身体や生態に関わる話題が多かった。「育てる」活動体験を継続すると、子どもたちは次第に「私が抱っこすると、耳をだらんとするよ。それは、ウサギが気持ちがいいからなんだよ。」「急に抱こうとすると、暴れて逃げる。ウサギが怖がっているからだよ。」というように、ウサギを抱く時、力の入れ方や抱き方などの扱い方の加減を、生き物の表情や動きを見ながら覚えていく。

また、「エサをやりに行くと、後ろ足で立ってエサをちょうだいと前足を出すよ。すごくかわいいよ。」とか「小さな音がしても、音がした方に耳が向いてピーンと立つよ。耳だけが動くのでおもしろいよ。」とウサギの動きやしぐさ、あるいは表情を感じ取るようになる。子どもたちには、ウサギへの細やかな心情や思いやりが生まれ、生き物に対して優しい気持ちで接



するようになる。

さらに、「今日は、暑いので飼育小屋に日陰をつくってあげよう。冷たい水もたくさんあげよう。」とか、「ウンチが柔らかいから、具合が悪いのかな。病気かもしれないから気をつけてみないといけない。」という気配りもする。

最初は、ウサギのことよりも、自分の気持ちが優先していた。自分がさわりたい時にさわりたい、遊びたい時に遊んでいた。エサや水も自分たちの都合のいい時に与えていた。「飼う」ということをとおして、生きているものへの扱い方が、自分本位の立場からウサギ（相手）のことも考えて扱おうとするように変わっていく。

このような体験をとおして、飼い続けるために必要なさまざまな気配りや、世話の仕方のコツ、あるいは、世話の段取りや飼い続けることから生じる見通しの感覚なども磨かれていく。

## 2 動物の身になって世話をする心を育てる

初めての飼育委員会の時、ウサギやチャボの飼育小屋の前でいつも子どもたちに、「今から飼育小屋に入ってもらいます。後でどんな気持ちでしたか聞きます。」と行って入ってもらう。子どもたちは、飼育小屋から出てくるなり、「いやだよ。こんな汚い所。」「すごく臭くて、汚いよ。」「こんな汚いところでは、ウサギやチャボがかわいそうだ。」「エサや水もない。お腹が減っているみたいだよ。」という。

すかさず、「先生もそう思う。ウサギやチャボだっていやだと思うよ。だから今から飼育小屋をきれいに掃除しよう。」とさとす。「みんなは、汚い、臭いというけれど、どこを掃除すればいいかな。」と子どもたちに聞く。すると、子どもたちは、「床、エサ箱、水入れ、汚いエサは捨てた方がいい。」と次々に気付いてくる。「自分が掃除をした方がいいと思う所をきれいにしてみよう。時間は15分間だよ。」といい、さっそく活動開始。

15分後、飼育小屋を見て、「これならウサギやチャボも喜んでエサを食べるよ。」「小屋がきれいになって、気持ちがいい。」等の声。飼育小屋の清掃も頑張ると簡単にきれいにできること、ウサギやチャボも喜んでくれることを体で体験する。

### Kさんの作文

5年生になって初めての委員会の時間、飼育小屋に入った時、ドキドキしました。一番大変だったのは、ふんがたくさんあって清掃が大変だったことです。清掃する前に先生から「自分がここで寝たり、食事をしたりできるぐらいきれいにしてね。」といわれたので、一生懸命にやりました。

終わって、チャボやウサギを小屋に入れると、すぐに、おいしそうにエサや水をとりました。チャボやウサギが喜んでいようので私も嬉しくなってきました。

6年生が「体育館の裏にウサギの好きな葉がいっぱい生えているので、取って食べさせ

るといいよ。」と教えてくれました。5年生みんなで、葉を取ってきてウサギにやりました。ウサギは、おいしそうに食べていました。ウサギのなかで私が一番好きなのはパンダウサギです。パンダウサギが好きなわけは、私の足へいつも近づいてくることや、エサを食べる時、口をモギモグと動かしてかわいいからです。

きれいになった飼育小屋を見せながら教師は子どもたちに、

- ①ウサギやチャボは自分でエサを食べたくても、水が飲みたくても、みんながあげないと食べたり、飲んだりできないこと。
- ②排泄物をきれいに掃除をしたくても、自分ではできないこと。
- ③しゃべれないので、「○○して欲しい」といえないことなどをさす。

飼い続けることで、生き物の『動きやしぐさ』『表情』などを見ながら感情移入し、ウサギやチャボの身になって考え、世話をする心が少しずつ育っていく。

### 3 飼い続けることで子どもが変わる

みんなで、きれいな飼育小屋にしたのに、チャボはなかなか卵を産まない。どうしてなのか委員会の子どもたちはチャボの習性を本で調べたり、校長先生やお父さんやお母さんに聞いたりした。

#### R君の作文より

今日、一番に学校に来た。最近、チャボが卵を産み出したので、「ひょっとしたら今日の朝、卵を産んでいるかな。」と、飼育小屋を見に行ったら、卵がひとつあった。まだ、温かいかと触れてみたら、そんなに温かくなかった。卵にウンチが付いていたので、それも一緒に触ってしまったので、あわてて手を洗いに行った。でも、とても嬉しかった。今まで、あまり産まなかったけど、最近よく産むようになった。ぼくは、チャボがかわいくなった。

R君のように初めて飼育小屋を掃除した時、「汚くって、臭い。面倒くさかった。チャボにつつかれていやだった。」といていたが、最後に「飼育委員会に入ってよかった。チャボが好きになったよ。」と見方や考え方が変わった子どもが数多くいる。(始めからウサギやチャボなどの生き物が大好きで、熱心に飼育活動に取り組んでいた子どももいたが。)

初めに、動物にあまり関心を持っていなかった子どもたちに、「チャボがかわいくなったのは、いつからですか。」と聞いてみると、次のような答えがかえってきた。

- ・卵の殻を割ってひよこが出てくるところを見た時。
- ・最初につつかれたり、臭かったりでいやだったけど、世話をしているうちにかわいくなっ

た。

- ・チャボが卵を産んだときからかわいくなった。
- ・初めはさわれなかったけど、チャボやウサギにさわったり、遊んだりしているうちにだんだんとかわいくなった。
- ・ひよこが転んだり、エサを食べたりする様子を見てかわいいと思った。だんだんと親鳥もかわいくなった。
- ・親鳥がエサも食べないで、一生懸命温めているのを見てかわいくなった。

このように、飼い続けるなかでいろいろな体験をしたことによって、チャボへの見方や考え方が変化している。そのなかでも群を抜いて多かったのは、やはり初めてひよこが誕生する瞬間を見たことであり、ほとんどの子どもがそれをあげている。飼育活動を継続していくなかで、感動的な出来事が子どもたちの動物への見方や考え方を少しずつ変えている。

### Sさんの作文

この間まで、飼育委員会の最大の問題はチャボが卵を産まないことでした。先生にいわれたとおりに、小屋もきれいにした。きちんとエサもやっている。野菜もやっているけど卵を産んでくれない。私達は、みんなでいろいろな本を読んで調べた。そして、外で運動をさせないからだろうという答えがでた。

私達は、できるだけ運動できるように小屋から出すことにした。ある月曜日、外で遊ばせた後、飼育小屋に入るとチャボは、ニワトリの卵より少し小さい茶色い卵を産んでくれた。私達は、手をとりあって跳び上がらんばかりに喜んだ。次の日も卵を産んでくれた。でもその卵を抱いてくれない。チャボに抱かせるようにいろいろと努力したが、全くチャボにはその気がない。またまた、困った問題が出てきた。

外で運動させることで、卵を産むようになったチャボ。委員会の子どもたちが手をとりあって喜んだのもつかの間、親鳥が産んだ卵を抱いてくれない。毎日、1個ずつきちんと産んでくれる卵。その卵をどうするかが委員会の子どもたちの新たな問題になった。

「卵をひよこにかえしたい。」「温めないのだから卵料理に使った方がいい。」「親鳥が温めないなら人間が温めてひよこにすればいい。やってみたい。」等のいろいろな意見が出てきた。チャボが卵を産むようになって、飼育委員会の活動が意欲的になってきた。

## 4 自己を律する心の育ち

A君はいつもお世話になっている近くの獣医師にチャボの卵を見てもらいに行った。獣医師からは、「この卵は、有精卵だから温めるとかわいいひよこが産まれる。」ことや「親鳥が卵を抱かないのは、みんなが見に来てうるさいからかもしれない。」ということも教えてもらって

きた。子どもたちは、卵を産むようになって、飼育小屋にいつも人がいっぱいだったことに気付く。さっそく、校内放送で「チャボが卵を産みました。静かにしないと親鳥が卵を抱きません。チャボを見たいと思いますが、しばらくの間、飼育小屋のまわりには行かないようにしてください。」とお願いした。

2～3日経つと親鳥が卵を抱き始め、約3週間すると、かわいい「ひよこ」が次々と生まれてきた。この瞬間のために、全校で約3週間我慢したのである。子どもたちは、生命の神秘さの一端にふれ、いっそう生き物に対する親しみが持てるようになった。

チャボの世話をとおして、「生き物を飼う」ことは、「自分の欲望や、わがまを押しつけることができない」ことを学ぶ。例えば、たくさんの卵を生ませたいと思っても、本当に卵を生んでくれるかどうかわからない。生んだ卵を抱いて欲しいと思っても、なかなか抱いてくれない。早くひよこが見たいと思っても、3週間は我慢しないとイケない。このように、早く育て欲しいとか、こうなって欲しいといった願いや要求も、チャボの育て方の状態に合わせて子どもたちが我慢せざるを得ないことが、飼い続けることで少しずつ体でわかってくるようになる。

また、自然のなかで自由に生活しているウサギ（チャボ）をほくたちの勉強のために、狭い自由のない飼育小屋で生活をしてもらっていることを肌で感じとった子どもたちは、新たな問題が起きても「ウサギやチャボの身になって考える」ことを忘れない。だから、ウサギやチャボがより快適に過ごせるようにしようと、自分たちがやってきた飼い方（世話・接し方）に対して自ら見直すことができるのである。



## 第4節 子どもの生活と動物飼育の例

### 奈緒子からの手紙

ある日、私（教師）の所に1通の手紙が届きました。小学校を卒業して2年経った奈緒子からの手紙でした。私は、奈緒子の顔を思い浮かべながら、懐かしい気持ちで封を切りました。手紙には「ビジン」の死が綴られていました。「ビジン」とは奈緒子が小学校時代に飼育委員会で育てていたウサギの名前です。

この手紙を読んで、私は胸が熱くなりました。

先生、お久しぶりです。お元気におすごしでしょうか。

今回、私がこの手紙を先生にさしあげたのは、以前学校で重傷を負ったウサギの「ビジン」について報告しようと思ったからです。

ビジンが重傷を負ったのは、確か私が5年生の時の11月頃でした。傷を負ってしまったのは、ウサギ小屋に入れてあったブロックを仲間が片づけていたとき、誤ってビジンの体の上に落としたからでした。「あっ」と思った時には、もう間に合いませんでした。

その後、私が近くの病院に連れていきましたが「手術をしても無理。長生きもできない。」というようなことをいわれたのを覚えています。

他のウサギといっしょに過ごすのは無理であろうと判断し、残りわずかな命ならとわが家に引き取りました。それからしばらくして、また学校で飼ってみようと思い、連れていったのですが、ビジンには学校での生活が無理でした。そして、再び、わが家へビジンはもどってきたのです。

ビジンは、下半身の神経、骨などがだめになってしまっていたため、排泄をすることが不自由でした。大の方は押し出されるようですが、小の方は1日に2、3回、私たちの手で膀胱をトイレで押して出してやるといった感じでした。

そのようなことがもう2年半続きました。この2年半の間、1年間に2回ぐらいの割合で排泄物が出ないときがありましたが、その度にいろいろなことをして、また出るようにしてあげました。このような大変なこともありましたが、ビジンはとても元気に過ごしてきました。

そして、ビジンは完璧にわが家の一員でした。2日以上泊まるような時は一緒に連れていったくらいです。

そのビジンが、約1週間前からまた排泄物がでなくなりました。今までに試みて成功した方法を再びためしてみたりしたのですが、効果はなしでした。そのくせ、食べるし、飲むしといった感じで、おなかがパンパンにはれてしまったくらいでした。そのせいで、動くこ

とはとてもつらそうで、今までのわずかな動きさえなくなったぐらいでした。

そして、きょう（9月4日）の朝、私は母からビジンがこの世を去ったことを聞きました。6時ごろまでは生きていたみたいといわれましたが、6時20分頃のビジンの体はすでに硬直していました。目はまるで生きているように開いており、硬直していたため、まぶたを閉じることができませんでした。口元は、まるで、かみしめているような感じでした。

私は思わず泣いてしまいました。学校でウサギが死んでしまった時にはなかったような気持ちでした。

何か、はじめて「死」というものを実感したような気がします。それにしても、とても悲しいです。これを書いている今も涙が次から次に出てきます。

私のまわりで、この世を去ってしまったのは、ビジンだけではありません。でも、今回の「死」が一番悲しかった。もう「悲しい」なんて言葉だけでは説明できないし、いくつならべても足りない、そんな感じがします。

今、ビジンの体は、小さなダンボールの箱の中におさめられていて、お花と水と、ビジンの大好きだった食べ物が供えてあります。

明日、ビジンは区役所に頼んで焼いてもらうことになりました。庭にそのまま埋めてあげたかったのですが、庭が狭すぎるため、そのようなことができないのです。

今までビジンがいた空間は、何かもの足りません。明日の朝、起きたらビジンがまたエサをほしいというように、首を前へ突き出してくるような気がします。

私は学校があるので、一緒に火葬場どころか、家からいなくなる時さえ見送りはできませんが、朝、早く起きてダンボールの中にいろいろといれてやりたいと思います。

きょうは学校で泣いてしまいそうだったので、こらえたり笑ったりして疲れてしまいました。

以上で報告を終わります。まだ気分が落ちつかず、変な言葉使いがあるかもしれません。

それでは、先生、ビジンの死がやすらかなものであったことを祈ってやってください。お願いします。本当に悲しい。

便箋がところどころ濡れたあとがありました。書いている途中にも奈緒子は泣いていたのでしよう。私には奈緒子の悲しみがよくわかりました。けれども、私は、奈緒子がここまでビジンの面倒を見てきたことに驚きと感動を隠せませんでした。

普通、ウサギがかわいいというのは、自分が世話すればそれに応えてくれるからだと思います。エサを持ってくれば近寄ってくるし、その食べ方は見ていて飽きない。「自分が育てている」という感じがするからです。

学校で嫌なことがあっても、ウサギがエサを食べる様子を見てみると、ほっとしたりすることはみなさんにも経験があるでしょう。ウサギと自分の心がつながっていると感じることもあるか

らです。人間は一人ぼっちでは生きていけません。「だれか一人でも、自分のことをわかってくれる。」ということが必要です。そんな時、生き物はそのような寂しさを忘れさせ、また、現実  
に立ち向かっていく勇気を与えてくれるのです。飼育委員の人はわかると思います。

そのような心を私に日記で知らせてくれた子もいました。その子は心ない友達の一言で傷つき、  
ウサギ小屋の前にきました。その子はエサをあげることで食べにきているウサギに愛情を感じ、  
自分の心も癒されていったのでした。つらい現実を忘れさせ、ウサギのしぐさからまた元気をも  
らったのです。

私はどんなに強い子でも、やはり、つらい悲しいことはあると思うのです。悩みのない人間な  
んていないと思っています。そんな時、学校に生き物がいるというのは大切だと考えています。  
ふと心を落ちつける場所が学校のどこかにあるということがとても大切だと思っているのです。

けれども、奈緒子の場合は少し違うように感じるのです。ウサギの「ビジン」は下半身が不自  
由になっていました。奈緒子がエサをあげたりしても、今は「かわいさ」というしぐさで応えて  
はくれないのです。奈緒子は、そんなことにはおかまいなくビジンに愛情を注ぎます。家に持ち  
帰り、排泄物の世話までしているのです。それも2年半という長い間。

奈緒子のビジンへのかかわりは「無私の愛」ではないでしょうか。見返りを望まない、相手に  
つくしてつくして尽くしきるといふ愛です。

考えてもみてください。2年半という長い間、排泄物の世話から、エサの世話、小屋の掃除な  
ど言葉にいい表わせない大変さがあつたにちがいません。

私は、奈緒子に世界中の人に愛と勇気と感動を与えてくれたマザーテレサを重ねてみました。  
マザーテレサは次のようにいっています。

「この世で一番大きな苦しみは、一人ぼっちで、誰からも必要とされず愛されていない人々の  
苦しみです。温かい、真の人間同士のつながりとはどういうものかも忘れてしまい、家族や友人  
をもたないがゆえに、愛されることの意味さえ忘れてしまった人の苦しみこそ、この世で最大の  
苦しみといえます。」

もはや見捨てられそうになったウサギへの愛と献身を奈緒子は実践しました。「すごいなあ」  
と私は思いました。

奈緒子はその後、お医者さんになるための大学に進みました。奈緒子は人のためにけんめいに  
尽くす立派なお医者さんになると思います。

## 【参考文献及び引用文献】

- 「イラストで見る日本の野生鳥獣365問」(1984) 監修 中島良吾 日本野鳥の会  
「ウサギ・ハムスター・リスたちの衣・食・住」(1994) 高橋和明 どうぶつ出版  
「図解 動物飼育の事典」(1976) 監修 岡田要 東陽出版  
「育てよう・調べよう 生き物大図鑑」(1990) 文一総合出版  
「育てる ふれあう 飼い方図鑑」(1998) 石森禮子編 ほぶら社  
「動物通信」(1997) 北多摩獣医師会  
「動物と子ども 園での飼い方・育て方」(1988) 中川美穂子 フレーベル館  
「やさしい教材生物の飼育栽培法 1 飼ってみよう」(1993) 栗田敦子編 東洋館出版  
「やさしい教材生物の飼育栽培法 2 育ててみよう」(1993) 栗田敦子編 東洋館出版  
「野鳥の医学」(1987) J. E. クーパー&J. T. エリー どうぶつ社  
「野鳥110番 鳥たちの救急手帳」(1987) 日本野鳥の会  
「育てる ふれあう 飼い方図鑑 ハムスター シマリス」(1998) 増井光子編 ポプラ社  
「育てる ふれあう 飼い方図鑑 ウサギ モルモット」(1998) 増井光子編 ポプラ社  
「ハムスターのしあわせ百科」(1998) 今泉忠明 スコラ



## 作 成 委 員 (五十音順)

(職名は平成12年3月末日現在)

大 西 秀 彦	筑波大学附属小学校教諭
小野寺 萬亀子	東京都文京区立ちどり幼稚園長
加 藤 稔	千葉県習志野私立秋津小学校教諭
桜 井 富士朗	(社) 東京都獣医師会理事
澤 田 妙 子	神奈川県川崎市立宮崎小学校教諭
白 岩 等	筑波大学附属小学校教諭
鷲 見 辰 美	筑波大学附属小学校教諭
一寸木 肇	神奈川県足柄上郡大井町立大井小学校教諭
辻 弘 一	(社) 東京都獣医師会会長
露 木 和 男	筑波大学附属小学校教諭
中 川 美穂子	日本小動物獣医師会 学校飼育動物対策委員会副委員長
福 島 有 子	東京都文京区立明化幼稚園長
藤 井 千恵子	東京都千代田区教育委員会指導主事
森 田 和 良	筑波大学附属小学校教諭
山 口 令 司	筑波大学附属小学校副校長
協 力：	(社) 日本獣医師会

## 参考資料

### 小学校学習指導要領における動物関係の記述抜粋

#### 小学校学習指導要領（平成10年12月）

#### 生 活

##### 第2 各学年の目標及び内容

〔第1学年及び第2学年〕

##### 1 目 標

- (2) 自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。

##### 2 内 容

- (7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。

#### 道 徳

##### 第2 内 容

〔第1学年及び第2学年〕

##### 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。

- (1) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。  
(2) 生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。

〔第3学年及び第4学年〕

##### 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。

- (1) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。  
(2) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。

〔第5学年及び第6学年〕

##### 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。

- (2) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重すること。